

<b>あいさつ</b>	今は昔、あるいは、今も昔も	辟雍会会長 荒尾 禎 秀	2
<b>特集</b>	<b>東京学芸大学の今そして昔</b>		
●	<b>1年生座談会 学芸大を選んだ理由</b> <small>わけ</small> <b>—想定外いっぱい。でも後悔ではない—</b>		4
●	<b>小金井での4年間</b>		
①	思ってもいない人生が始まった	オペラ歌手 澤 村 翔 子	10
②	忘れられない卒業制作	アパレル会社勤務 関 雪 君	11
③	まだ勉強したくて帰ってきました	都立高教諭 赤 澤 愛	12
④	学芸大と阿波踊りと・・・	附属養護学校教諭 池 尻 加奈子	13
●	<b>キャンパスルポ</b>	遠 藤 満 雄	14
①	昔「サークル長屋」、いま「サークル棟」		
②	シンボルは？ 時計塔と芸術館		
●	<b>タウンマップ</b>	美術科3年 藤 井 由香利	18
①	いつもとちがうムサコの顔が見えてくる！——武蔵小金井		
②	身近な自然・名所を歩こう！——国分寺		
●	<b>随筆 —そして今思うこと—</b>		
①	メルヴィル島訪問記	「よも出版」主宰 守 屋 敦 子	22
②	学校の抱える今日的課題とは	教育委員 月 岡 透	27
③	鉢こぼれ	「新企画」出版局 前 島 一 雄	28
④	「大学」というところ	京都大助教授 瀬 戸 口 浩 彰	30
⑤	生き方の原点は学芸大学	アナリスト 中 川 美 紀	31
⑥	教養系第1期生挑戦記	富士通総研 木 島 正 博	33
⑦	学芸大学に学んで	付属学校運営参事 松 村 茂 治	34
●	<b>歴史散歩——源流を訪ねて</b>	遠 藤 満 雄	36
●	<b>附属図書館 “お宝” 細見</b>	蜂 谷 文 子	40
●	<b>二〇周年記念飯島会館</b>	学長 鷲 山 恭 彦	42
●	<b>各部活動報告</b> 総務部 事業部 組織部 広報部		44
●	<b>本部報告</b> 第2期荒尾体制の1年目		46
●	<b>編集後記</b>		48



## 今は昔、あるいは、今も昔も

その頃、統合された小金井の学芸大学の正門への道の目印は「米屋の羊羹」の大きな看板だった。そんなところに、いかにも不似合いな大きな看板がドンと立っているのが不思議だった。

「号館」と呼んだ教室に行くには、国鉄の武蔵小金井の駅から、東門を通過して北門に行く「第二浄水場」行の黄色い京王バスに乗るのが便利だった。降りた北門の道は雨の日にはひどい泥んこ道だった。教室は1号館から4号館までのほかに、厩舎跡とかいう木造の平屋が、まだいくつが残っていた。「書道」の授業はたしかそこで受けた。時計台のある建物は図書館で、その前にはグラウンドがあり、時に野球の試合での歓声が上がったりもした。農場は奥深くに別世界のようにあった。

切れ切れになる記憶――。

いま、正門の桜は老木となり、現図書館前の櫓はそびえ立つ。「米屋の羊羹」の看板はなく、その位置には「セブンイレブン」が賑わいをみせ、正門への道の右には「国立大学法人 東京学芸大学」のあかがね色の看板がそびえる。国分寺から来る学生が増え、始業時には銀輪の行列が正門に吸い込まれて行く。S棟N棟W棟が教室で、4階に行くエレベーターには学生が乗る。北門近くに移動したグラウンドは人工芝になり、農場は環境教育実践施設となった。

大学での過去は青春ゆえに、それほど美しくはないが、その思い出となると、だれにとっても、セピア色にきれいに仕立てられ、またほろ苦い。

同窓生が集まれば、そのような思い出がよみがえる。時空を超えて思い出の中に立ち返ることができる。そし

辟雍会会長

荒尾 禎秀

(東京学芸大学教授：1966年学部国語科卒・  
1972年修士修了)



て、旧友の笑顔から、淡々と明日へと続く現実の生活での力と知恵を得る。

同窓会というのは、そんなものだろうと思う。小学校なのであれ、大学のであれ。

もたらずものは、大きな期待ではなく、ささやかな安堵と感謝。

東京学芸大学全国同窓会である「辟雍会」もそのようなものかと思う。

「辟雍会」の「辟雍」はどういう意味かとか、漢字が難しいとかいう質問や意見をよく耳にする。簡単に言えば「辟雍」とは紀元前の中国周代の「大学」、世界最古の大学である。同じく学んだ母校というものを、象徴的にあらわしていると考えてよいであろう。「辟」は明らかか、「雍」は和らぐの意味。その漢字は確かに難しいが、「東京学芸大学」の名称に「學藝大學」という康熙字典体を用いるのをよしとする方も多いのだから、このくらいはガマン。その名称の提案者は中国古典学の佐藤正光博士である。

「辟雍会」の会員はどのくらいか、と聞かれることも多い。残念ながら、全国同窓会と称しながら、まだ卒業生の組織率は甚だ低い。この会は出来て未だ3年しか経っていないのだから、前途は程遠くもあるが、洋洋ともしている。今年4月からの在校生はそのほとんどが会員になっているから、今後この状態で推移すれば、卒業生会員は急増し、確実に足腰の強い同窓会になる。

「辟雍会」は卒業生だけでなく、在校生、そして教職員、さらにはOB教職員も会員になっていることについ

ての質問も受ける。これはいわば“オール東京学芸”の発想である。会の創設に多大な尽力をされた、大学の数学科の教授池田義人氏が積極的に進めた会の基本理念で、新しい形の同窓会である。会の初代幹事長であった池田先生は、惜しくも昨年3月に現職で急逝された。池田先生が考えていたこの会の理念は、この大学に縁があって集い、学び、働いた人々が一体となって、よき教育・文化の情報発信を行うことであった。また、皆で我らが母校を応援し、後輩のために微力を尽くすことを願っていた。もちろん会員の親睦も大事な事業の一つとして考えていた。その精神の表れが“オール東京学芸”になっている。

今年も千人以上の新入生が同窓になった。めでたい限りである。

これを機に、母校になかなか来られない同窓生にも、2006年の母校がらみの小さなニュースを二つ供したく思う。

正門の前のバス通り、ちょうど正門への道近くに、新たに信号機つきの横断歩道ができた。

これまで、武蔵小金井からのバスを降りたら、少し戻って横断歩道を信号に従って渡った。しかしそうしないでバス道を横切る学生がかなり多く、近隣住民からの強い批判が続いていた。大学は一時は目立つユニホームを着た非常勤の交通指導員をバス停に配置したりもした。新しい横断歩道はこの状況を改善するに違いない。そのうちに、なんでこんな近距离に横断歩道が続いて2本もあるのか、と不思議がられる日が来るのではないか。

夏ごろだったか、教室や廊下を清掃している非常勤の職員の「落書（らくしょ）」が一部の人々の間で話題になった。

講義棟の分別ゴミ箱のところに余り目立たぬように貼られていた。誤写があるかも知れぬが、下に掲げたのがその全文である。

最後の戯れ歌に「辟雍」という語が入っているのに驚く。これを読むと、良くも悪くも、「見ている人」はいるものだと思う。

今はもう昔になってしまったが、あの頃の学生も、今の学生とあれこれ変わらないようでもあり、…………。

護美鳥の翁の嘆き文十首



本学の周礼既に衰へて分別する分別もなし

名にし負はばいざ言問はんこの様で人を教ふる資格はありや

賢しらの議論はすれど行ひは園児に劣る教師の卵

教室の中は茶店かコーヒーの缶あり菓子喰ひさしもあり

身を飾れる術は知れども身を修む心なくして他人（ひと）は迷惑

ことわりや躰は単位にならねども世に出ていつか恥をかくらむ

禁煙の場所と知りつつ煙草吸ふ規則破りの叡智なるもの ホモ・サピエンス

マッチ擦り束の間快樂求めけり身を捨てるほどの害はあれども

いとせめて吸ひたき時は密やかに人の気配の陰でこそ吸へ

これやこの礼と大謝を学ばずふ辟雍なりとは片腹痛し



1年生座談会

# 学芸大を選んだ理由

—想定外いっぱい。でも後悔ではない—

出席者

板川 舞 (G類美術)  
古川 拓明 (G類美術)  
高橋 佳 (A類社会)  
高木 佑也 (A類社会)  
小林 葉子 (A類保健体育)  
和田 あゆ美 (A類学校教育)

新井 志穂 (G類美術)  
小出 真琴 (A類社会)  
高垣 宗 (A類社会)  
山田 浩一郎 (A類理科)  
曾我 真琴 (A類保健体育)

司会

遠藤 満雄 (辞職会副会長・1968年社会科卒)

今年4月の新生は東京学芸大学としては59期目の入学者ということになる。その前の師範学校の歴史を積み重ねれば、136期になる。長い長い歴史である。当然ながら入学動機も、学園生活も大きく変容した。明治、大正、昭和・・・と、初等教育の教員を養成するという「国家的方針」のもとに存在した師範学校、教員養成目的の大学として再スタートした戦後・・・、そして教員養成の単一目的だけではなく、広く社会に貢献する人材の養成を加えた現在——。学生たちは何を夢見て本学を選んだのか、そして今、何を思っているのか・・・。学園生活の1年目が間もなく終わる1年生に集まってもらって「学芸大学」を語ってもらった。



——まず、数ある大学の中から、なぜ東京学芸大学を選んだのかということから伺いましょう。

**板川** 教養系に美術科がある大学、ということで選んだのですが・・・。入学して約一年、ようやく他の美術大学とは違うこの大学の特徴というか、メリットのようなものが見えてきました。

**新井** 最初は私立の文系を志望していたんですけど、私にはこの大学が向いているように思えたので選びました。第二次試験の合格確率が



高いと思ったのも大きな理由でした。入ってみたら希望の学科を変更できると聞いてうれしくなりました。

**和田** 私は学校教育を選びました。入学の時に専攻を一つに絞らなくてもいい。だんだん勉強を進めていって、得意な科目の教員資格が取れるところが魅力でした。将来は教員になって教育格差の問題などに取り組めるような仕事につきたいと思っています。



**曾我** 小さいころから小学校の先生になりたいと思ってきました。それで進学先を考えたたらこの大学しかありませんでした。入学してみたら、自分が考えていたよりもずっといい学校で、すごく満足しています。授業や勉強の内容もいいのですが、なによりもクラスの仲間が素晴らしくて、毎日楽しいです。

**小林** 私も教員志望です。両親とも教員という家庭に生まれましたから、もう物心つくころから一生の仕事は教師、と決めていました。親は高校の教員なのですが、私は小学校の教員になりたい。保健体育を選んだのは、体を動かすのが好きなことと、将来、子供たちと



一緒に体を動かし、健康とはなにかを常に考えていたいから……。

**山 田** 僕はちょっと変わっていて、みんなよりかなり年を食っています（笑）。というのは東北大学理学部からこの大学に入りなおしてきたからです。専攻は地学だったんですが、塾の教師や家庭教師をしているうちに、自分は教師に向いているのではないかと思ひ始め、この大学を受験しなおしました。今はとっても楽しいです。勉強も楽しいし、前からやっていた空手をこの大学でも続けていますので、そのやりがいもあります。ただここは僕の流派の空手部がないので、これから仲間を作って、クラブを作ろうと思っています。



**古 川** 金属工芸の鍛金をやりたいと思っています、それで鍛金のやれる大学で合格したのはここ学芸大だけだったから……。将来は教員になって、鍛金を続けて行きたいと思っています。

**高 木** 僕は社会科で地理の勉強をしたくて、大学を探しました。それで好きな地理の勉強ができて、将来は先生になって、教えながら勉強もできる道があるというのでこの大学を選んだのです。ところが入学してからは地理の勉強よりも部活の方に夢中になってしまって（笑）。テニスに熱中しています。

**高 橋** 北海道から出てきました。東京の大学に進むのが希望だったんですが、試験科目をいろいろ検討

将来は先生になって、教えながら勉強もできる道があるというのでこの大学を選んだのです。


してみたら、ここが一番僕に向いているみたいだったので……。巧く合格できて、今は野球部に入って、野球ばかりやっています。うち



秋晴れのキャンパス


の野球部は栗山（英樹）先輩（元ヤクルト、野球評論家）や加藤（武治）先輩（横浜ベイスターズ投手）のようなプロ野球選手も出ているし、伝統があるので、強いチームになりたいです。僕みたいに体育科ではない部員もいる。すごく恵まれていると思います。

**小林** そうそう、私は曾我さん、和田さんとラクロスをやっているんだけど、部活は体育科じゃない人もたくさんいます。それがいいと思っています。

**小出** 私も社会科で地理専攻です。青森出身ですが、将来は社会科の先生になりたいくて……。国立大学で、教育学部というか、 教員養成に力を入っている大学を探したら、自然と学芸大学に行き着きました。地元の青森大学もありますけど、やっぱり東京で勉強したかった。将来は青森に帰るのかどうか、まだ決めていません。

——— それぞれにしっかりした目的があって学芸大学を選んでいきますね。皆さんのお話を伺って「ただ何となく」といった成り行きに任せて入学してきたのではないことが分かって頼もしく思うと同時に、それが学芸大学の特色だと思いました。学芸大学は大変に長い歴史があって、大学になってからだけでも間もなく60年を迎えようとしています。しかし、その歴史は必ずしも一本道ではなくて、何度も紆余曲折を重ねてきました。私事ですが、僕は1964年（昭和39年）に入学しましたが、ちょうど東京でオリンピックが開催された年でした。そのころの国立大学の入試制度というのは一期、二期制度でして、東大、一橋大、東工大、東京芸術大などは入試時期の早い一期校、わが学芸大学は東京では唯一の二期校でした。つまり一期校の入学発表を見てから受験できた。と

いうことは学芸大学に入学してきたほとんどの学生は、「一期崩れ」と称しまして、必ずどこかの一期校を受けて失敗した連中ばかりだった。だから入学式が終って少し落ち着くとみんな口々に「僕はこんな大学にくるつもりはなかった」なんて言い合うんですね。そんな二期校制度は大学入試センター試験が始まって消滅しましたけれど、そういう僕らの時代と比べると、皆さんは実にしっかりした目的意識を持っていらっしゃる。ところでそういう目的を持って入ってきてみて、どうですか、予想通りの学校だったでしょうか。

**高木** 真っ先に思ったのは施設が古ぼけていて汚いということかな。古くて情緒があるというのではなくて、古ぼけて汚いという印象です。

**古川** そうそう、建物のコンクリートがはげていたりしてね。芸術館なんて壁に穴があいていますよ。——— あそこはまだ新しい建物なんじゃないですか。

**古川** エッ、あれで新しいんですか。そうは見えないな。メンテナンスが悪いというのかな。

**和田** サークル棟なんか最悪ですよ。聞けばあの建物は「新サークル棟」って言うんですけど。どこが新しいの、って言いたくなります。中に入ったらまるでごみためですよ。あれは大学の責任というのではなくて、学生がもっとしっかり掃除をしてきれいに管理しなくてはいけないと思いますね。

**小出** 建物だけではなくて設備も古いですよ。たとえばエアコンなどの設備もまったく充実してなくて、暑さ、寒さが辛いですよ。

——— OBとしても同感ですね。僕らのころはまだ建物が新しく、逆に貫禄も何もなくて殺風景と感じたけど、あれから40年近くなって、年輪を重ねて貫禄が出てきた、という感じがまった

くないもの。他の伝統校は古くても趣があるの  
にね。せいぜいいいなと思うのは、桜や樺など  
の植物が立派に育って、緑豊かなキャンパスに  
なったということかな。それはそれで植物が老  
齢化して傷んできているという別の問題がある  
ようですね。

**小 林** 保健体育科は予想以上に女子が多いということ  
には驚きました。うちは他大学に比べて全体的  
に女子が多いのではないかな。これは意外でし  
たね。大きな特徴です。

——— 逆に僕らのころは女子学生だけだった家庭科に  
男子学生が入るようになったという変化もある  
ようですよ。全学科満遍なく男女がいるわけ  
でしょ。授業の中身なんかはどうですか。

**曾 我** 大学ってもう少し自由があるのかと思っていた  
んだけど、意外とそうでもない。授業が多くて、  
ほとんど空き時間みたいながない。それに授  
業はサボれないしね。他の大学にいった友達  
の話を聞くと、かなりラクみたいで、そんな昔  
の友達と遊ぶ暇もありません。

**和 田** 私もそう思っています。それに勉強が難しいとい  
うのか、単位を取るのが難しい。このまま  
では大変なことになると思っています。

**新 井** 美術科に入ったけれど、思った  
より美術の授業が少ないんです  
ね。驚いたというか、ちょっと  
不満です。

**板 川** そうそう、私もそう思う。

**高 木** 授業内容があんまり面白くない  
な。先生が勝手にやっているみ  
たいで……。

**高 垣** そうだね。これはという面白い  
授業にまだ出会っていないね。

**山 田** 教育の問題についてもっと話し  
合える場が欲しいですね。先生  
とも、友達とも……ちょっと

教育の問題についてもっと話し  
合える場が欲しいですね。

そんな雰囲気は足りないと思いますね。

——— 授業内容の話になってきたけれど、それは  
ちょっと後回しにして、キャンパスの環境につ  
いて話してくれないかな。ご承知のようにここ  
のキャンパスは師範学校から大学になったとき  
に整備されたんだけど、当時はほとんどの大  
学が都心にあって、ご近所には関東大震災のた  
め皇居のそばから移転してきた一橋大学がある  
くらいだった。そこへ旧日本陸軍の敷地だった  
この場所を整備して学芸大学ができたわけ  
です。ご覧のように広い敷地ではあるけれど、ほ  
とんどが武蔵野の原っぱで、砂埃が立っていた  
といいます。それが半世紀以上の年輪を重ねて、  
かなりいい環境になったと思うのですが、どう  
ですか。

**高 橋** 大学が環境整備に力を入  
れているのは分かります  
が、野球部の部員を使っ  
て野球場の周囲に花を植  
えるというのは、どん  
なものでしょうかね。なんでも学長先生のアイ  
デアで野球部の監督が僕らに命令している  
んですが、あそこに花を植えても練習で踏み  
潰してしまったりして育たないと思うんです  
が……。



**小 林** 敷地が広い、という話ですけど、あんまり広い  
と感じたことはありませんよ。たとえばグラウン  
ドは狭くて……。私たちラクロス部は、グ  
ラウンドをくじ引きで取って使うんですが、こ  
のクジがなかなか当たらない。希望者が多すぎ  
てね。つまりグラウンドが不足しているとい  
うことではないですか。

**曾 我** ほんとうにあのグラウンドをどれだけのクラブ  
が使っているんだろう。ただ人工芝のグラウン  
ドなので、ウエアがあんまり汚れなくて、洗濯  
がラクですけどね（笑）。

**板川** 生協の売店、食堂の混雑がひどいですよね。学生数に比べて、施設が貧弱なんじゃないかな。あれをなんとかして欲しいです。



**小林** 混雑もひどいし、メニューもあんまり魅力的じゃないですよ。私立大学に行った友達の話では、学食がそれこそカフェテリアみたいになっていて、メニューも豊富だし、味も凄くないんですよ。うらやましいですよ。

**高木** 貧弱といえば、学生証がひどいよね。ぺらぺらの紙切れみたいで……。もう少し威厳というか、他人に見せたくくなるような立派なものにして欲しいな。

—— 次にキャンパスを出てみましょう。大学の周囲の環境について何か感ずるところはありませんか。最近では多くの大学が都心を離れて、うちよりも遠い八王子などに移転してきているけれど、学芸大は「田舎で遠い」とは感じませんか。

**曾我** あんまり感じません。町の環境で不便を感じることはありませんね。あっ、国分寺駅周辺が早実の影響で混雑がひどいことかな、気になるのは。



—— そうか、例の「ハンカチ王子」の騒ぎで、すっかり全国区のにぎわいになったしね。それにしても国分寺は大変な変わりようですよ。凄く立派な町になった。みんな大学の周辺に住んでいるんですか？。下宿というのか、アパート探しなど苦労はありませんか。

**高橋** 学芸大というブランドが効力を発揮するみたいですよ。先輩たちのお陰でしょうがうちの大学の評判がいい。バイト先なんかでも信頼されています。

—— それはうれしい話ですね。学芸大学の誇るべき

「伝統」かもしれません。今、「先輩」という言葉が出ましたけれど、先輩、後輩のつながり、つまり縦のつながりということで何か気のついたところはありませんか。この「辟雍会」というのは学芸大の長い歴史の中で初めてできた全国同窓会で、まさに縦のつながりを作って行くところというところに大きな目標を置いているんだけど……。

**山田** そうですね。そういう先輩を大いに頼りにしたいと思います。4年後、教員になって就職していくんですけど、そのとき、自分の目標になるような先輩に出会いたいです。

**曾我** そう、いろいろ相談に乗って欲しいですね。教員になるのはどうしたらいいか、教員になってからどうすべきか、なんてね……。

**新井** 教員は長い伝統があるようですけど、教員以外の就職、つまりG類の人の就職問題も大事ですよ。これも先輩を頼れるといいですね。

**高垣** 僕は和歌山県の田辺市というところの出身なんですけど、もしかすると卒業したら故郷に帰るかもしれない。そんな時、地方の情報というのか、自分の故郷にどんな先輩がいるのか、是非知りたいですね。



**小出** OBやOGの人たち、他学科の人達の情報が欲しいです。そしていろんな人脈が欲しい。

**古川** 先輩たちとの交流が常にある環境であってほしいですね。先輩たちがもっと気楽に大学に遊びに来てくれるといいんですけど……。



**高木** そうそう。本当に縦の関係大事ですよ。辟雍会がそのための存在だということをあんまりよく知りませんでした。確か、入学の時に入会の手続きを取ったことは、なんとなく覚えていま



すが、その後、あんまり情報がありませんでしたからね。

それは大変に申し訳ないことです。遅ればせですが、今日こうして皆さんに集まっていたのも、機関誌の原稿を作るといふ目的もさることながら、会員である皆さんの声をじかに聞きたかったのです。ご承知のように辟雍会は「同窓会」とっていますが、世間によくある同窓会とはちょっと違います。普通同窓会というと、卒業生だけの集まりですよ。ところが辟雍会は、入学と同時に入会していただく、つまり現役の学生から卒業生、大学職員まで含めた組織です。その目的とするところは、今日、まさに皆さんから出た卒業生と現役の学生諸君を結ぶパイプになるということです。卒業生の情報を、現役の皆さんに伝える、つまり先輩と後輩のつながりをしっかりと築いていくということです。おそらくこんな同窓会組織は他大学にはあまりないと思います。どうか、どんどん利用して下さい。というか、皆さんでこの辟雍会を育てて下さい。本日は有難うございました。

先輩たちとの交流が常にある環境であってほしいですね。

## ■ 司会者感懐

「十年一昔」といいます。これは時間の流れへのさまざまな感懐を表している言い様だと思います。歴史は十年を一区切りとして刻まれていくのかもしれませんが。その伝で行けば、僕などはもう「四昔」も前の遺物です。それだけに、今、学芸大学に入学してくる学生たちはどんな人たちなのだろう、僕らのころとどこが違うのだろう、という興味は尽きないものがありました。

結局11人の1年生が集まってくれました。彼らと2時間余り座談した後の感想を一言で言うと「頼もしい」というものでした。しっかりと自分の人生を見据えているということに心強さを感じました。

座談会の中でも発言させていただきましたが、僕は学芸大がまだ二期校であった時代に入学し、卒業しました。その二期校制度が変わったのは僕らが卒業した11年後、1979年だそうです。「五十年史」には「この年から国立大学共通一次試験がスタートし、かつての一期校、二期校の区別がなくなり、本学志願者にいくらかの質的变化が起こった・・・」とさりげなく、わずか2行記述しているに過ぎません。しかし、その制度の中で学生生活を送った僕らには非常に大きなことでした。今の学生諸君にいわゆる「一期崩れ」という言葉が消滅していることは喜ばしい限りです。

この現役生たちの頼もしさ、素晴らしさをこのまま持続させ、次世代を担う人材に育て上げていくのは、われわれの責務だと痛感しました。辟雍会の存在価値をますます強く認識しました。



構内のマンホールにも「紋所」が。



東門からの欒並木

小金井での4年間①

## 🌀 思ってもいない人生が始まった

オペラ歌手  
澤村 翔子  
(2004年 音楽科卒)

私は熊本の出身です。18歳の春、その九州・熊本からはるばる東京に出てまいりました。「なぜ学芸大に？」とよく聞かれました。今でも聞かれます。でも私の中では学芸大以外の大学は考えられなかったのです。「ずっと音楽、特に歌とかかかわっていたい」という強い夢がありました。そう考えた時「教師」という職業が思い浮かびました。その私の夢をかなえてくれるのは東京学芸大学の音楽科しかなかったのです。音楽大に進むという選択はまったくありませんでした。まっしぐら東京学芸大学です。

私が入ったのは「D類特別音楽教育科」というクラスでした。教員養成課程です。附属の大泉高校で教育実習もしましたし、5年かかりましたけど、教員免状を手にして卒業しました。だから私の進路は中学か高校の音楽教師という道だったのです。1年、2年の途中まではそのことにまったく疑いを持っていませんでした。学校では授業をきちんと受けていたし、歌は合唱を主にやっていました。

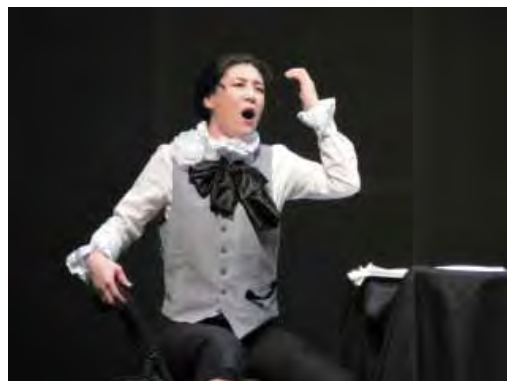
それが2年生の時に今思えば人生を決定付ける「転機」が来たのです。3年、4年の上級生が中心になって「オペラをやるよ」という計画が持ち上がりました。それで出演者をオーディションするということになって、私もそれに応募しました。合唱だけではなく、ソロで歌ってみるというのもいいか、ぐらいいい気持でした。ところがこのオーディションに合格してしまったのです。出し物は「カルメン」ということが決まって、私はそのカルメンを演ずることになりました。この計画は学生の間から自主的に起こったことなのですが、だんだん本格的になって、卒業生も応援に駆けつける、という事態になりました。その先輩たちが私たちを「しごき」ました。それで舞台は出来上がり、芸術館で公演ということになりました。

というわけで私はオペラの初舞台を踏んだのです。この公演が終わった後、その年に卒業した先輩で、演出からオーケストラの指揮までやってくださった先輩がこう話

しかけてくれたのです。「君は音楽の世界に進むことを真剣に考えた方がいいよ」。つまりプロの音楽家になれ、という勧めでした。それまでは考えてもみなかったことですが、それがきっかけでプロを目指すことに決めました。その先輩がずっとついていてくれました。今でもついていてくれます。つまり私たちはその後、結婚したのです。彼もオーケストラの指揮者としての仕事をしています。

それから私は大学にいながらオペラの舞台を踏むと言った、いわば二足の草鞋を履くようになりました。卒業に5年かかったといいましたが、実は試験と舞台の本番が重なってしまい、その大事な試験を受けられなかったのです。それで結局「留年」という羽目になりました。

卒業して3年が過ぎました。おかげさまでなんとかプロの歌手としてやっております。今、クラシック音楽のブームだそうです。漫画やテレビドラマに触発されたものかもしれないですが、この世界に住んでいる人間としてはありがたいことだと思います。ただ、ブームと言うことは世間の関心が高まっているということでもありますから、ますます実力が問われます。まさに実力本意の世界です。学芸大学出身の同業者というのはそれほど多くありません。でも私は「学芸大学出身」ということを忘れずに行こうと思っています。10年前には考えてもいなかった世界に今住んでいるのですが、こうした私の人生を方向付けてくれたのは学芸大学、小金井のキャンパスなのでありますから。 (談)



小金井での4年間②

## ◎ 忘れられない卒業制作



アパレル会社勤務  
関(みん)雪君  
(2002年 美術科卒)

私は中国・上海生まれです。小学校まで上海にいたのですが、1992年、母親と一緒に日本に来ました。それで東京都墨田区立鐘ヶ淵中学校から都立工芸高校を卒業し、東京学芸大学の美術科に進みました。

なぜ学芸大学を選んだかということ、子供のころから物を作るのが大好きで、高校も工芸高校に進んで金工や木工をやりました。将来もそんな仕事をしたいと思って大学を探したところ、学芸大に美術科があって、金工があると分かり、躊躇することなくこの大学を選びました。教員養成課程ではないG類です。

入学してみて私の選択に間違いはなかったと思いました。ほんとうに素晴らしい環境でした。大学の4年間はまるで夢のようでした。好きなことを好きなだけやってくれるのですから。先生方も「ああしろ、こうしろ」ということは一切おっしゃいませんでした。すべて自分で考えて、自分で制作できるのです。そしてやっていることに対して先生方は本当に適切なアドバイスをしてくれました。

卒業制作は今考えても、どうしてあんな大作を作れたのかと思うほどで、自分でも「力作」だと思っています。畳2枚ほどもある大きな鉄板に自分の顔と中国、日本の風物を浮き彫りにしました。この作品は今でも自宅に大切に持っています。

大学では美術だけではなく演劇部に所属して、舞台にも立ったんですよ。なんと日本の時代劇。着物を着て袴を着けて……。中国人である私が日本の歴史劇をやるなんて、本当に楽しく貴重な体験でした。

私は兄弟がいません。ご存知かもしれませんが、私が生まれたころ(1979年)の中国は「一人っ子政策」と言うのがあって、子供は一人しか産めなかったのです。それで私の小学校時代はクラス全員が一人っ子です。日本に来て母と二人暮らしでしたが、さびしくはありませんでした。しかも高校、大学とお友達がたくさんできて、本当に楽しく暮らしました。

卒業してアパレル関係の会社に就職したのですが、母が交通事故で怪我をして長い入院生活をしなければならなくなったので、仕事をやめて看病をするという生活になりましたが、その後、母もだいぶ回復したので、また再就職して働き始めました。現在は日本に来て、母と一緒に初めて住んだ錦糸町で、メンズウエアの会社の出店を任されています。

また、昨年、結婚もしました。彼が上海で暮らしてみたいというので、久しぶりに上海にも戻ってみました。

というわけで、私は中国と日本の二つの「文化」を生きています。こんな私を作ってくれたのも学芸大学だと思っています。(談)

小金井での4年間③

## 🌀 まだ勉強したくて帰ってきました



都立高教諭  
赤澤 愛  
(2000年 家庭科卒)

私は7年前にB類家庭科を卒業して、現在東京都立の農林高校で教員をしております。というのは正確ではなくて、昨年4月から母校に戻って1年間研究生生活をしました。それもこの3月で終って、再びもとの職場の高等学校に戻ります。

6年間、高校の現場で教師をし、さらに研鑽を積みたく自ら希望して母校に戻る・・・考えてみれば随分贅沢なことだと思います。私を送り出してくれた職場の仲間や東京都にも感謝ですし、そんな私を受け入れてくれた母校も本当にありがたいと思います。こんなことができるのも私が東京学芸大学を卒業しているからだと思えます。

私はさいたま市(大宮)の出身です。子供のころから学校の先生になることを夢見ていました。それで大学進学には迷わず東京学芸大学を選びました。地元の埼玉大学という選択もあったのですが、やはり東京の大学で勉強したかった。それで一応、後期課程に埼玉大に願書を出しておいて、学芸大を受けたのですが、うまく第一志望の学芸大に大合格できたので、ここ小金井にやってきました。ちなみに高校は星野高校で、3年前のアテネオリンピックに出場した杉森美保さん(京セラ)と同窓なのですね。考えてみれば同時期に在学していたはずなのですが、なにしろ1学年に1000人近くもいるような大きな学校なので、彼女とは高校時代は面識はありませんでした。学芸大に来て杉森さんがいることを知り、誇りに思っています。

私が勤めている農林高校というのは、大変に特殊な学校だといえます。所在地は青梅市で、東京とは言っても随分と田舎といっはなんですが、都会の雰囲気から遠いところです。学んでいることも農業と林業ですから、いわゆる第一次産業にかかわることです。生徒たちも大学進学を狙って勉強ばかりしているというわけではありません。どちらかという勉強よりも・・・といった感じの生徒もいます。でも、そんな

環境だからこそ「家庭科」という科目がとても大事だと思っています。家庭科は社会科、国語などの人文系と理科や数学などの自然科学系の両方にまたがって、総合的な知識を求められます。生徒の日常生活と密接に結びついている、といえます。それだけに私は生徒の関心をどのようにして引き出すか、どうしたら興味を持ってもらえるかを、いつも夢中で考えています。そのためにはもっと自分を磨かなくては駄目だと思って、この1年間母校で研究を重ねることにしたのです。お陰でまた元気に職場に戻り、生徒たちと接することができると楽しみにしています。

振り返ってみると、東京学芸大学はとってもいいところでした。大学らしい雰囲気を持ったところといっいいと思います。第一にまったく自由でした。何をやるにも自分で決めることができる、やりたいことは何でもできる、という場所でした。

私は専攻である家庭科の勉強はともかく、オーケストラ部に入っていて、4年間トランペットを吹いていました。オーケストラというとみんな音楽科の学生ばかりと思いがちですが、学芸大のオーケストラは団員が100人近くもいるのですが、半数は音楽科以外なのです。私は高校時代は書道部に所属していて楽器とは縁がなかったのですが、中学時代、吹奏楽部において、トランペットをやっていたので、大学で再び挑戦したのです。これが私の大学生活を充実させてくれました。家庭科以外の仲間と交わることができたし、自分の生活も人生観も拓げることが出来たと思うのです。

自分の意思で自分の人生を広げることができる、これこそ大学生活の醍醐味です。存分に楽しんで欲しいと思います。

蛇足ですが、私の夫も学芸大の出身で、現在、神奈川県川崎市で教員をしております。彼と知り合ったのもこの学芸大学のキャンパスでした。(談)

小金井での4年間④

## ◎ 学芸大と阿波踊りと・・・

附属養護学校教諭  
池尻 加奈子

(2001年 C類障害児教育学科卒)

お囃子の音を聞けば心が浮かれ思わず体が動いている。私をそんなお祭り女にさせてくれたのは、学芸大での学生生活で出会った阿波踊りである。「子どもに踊りを教えるから学生ボランティアを探している」と声をかけられ、「子どもの世話ならば」と二つ返事で引き受けたことがそもそもの始まりであった。武蔵小金井駅前、毎年夏に阿波踊りのお祭りが催されるのだが、すっかりお祭りの虜となってしまった。

卒業後、横浜にある養護学校に勤めることになったため一度踊りから離れたのだが、夏が近づくにつれお祭りが恋しくなり、ついに翌年からは横浜から小金井へ、片道2時間かけて踊りの練習に通うようになっていた。そんな生活を3年送り、この愛して止まない阿波踊り続けるためにはどうしたらよいか考えた後、踊る阿呆の私が出した結論は附属養護学校への転勤であった。

附属養護学校は、私が教育実習でお世話になった学校である。母校と言っても過言ではないくらい、先生方には懇切丁寧な指導をしていただいた。研究授業では、高等部の生徒に阿波踊りを教え、実習終了後の行事の中で発表をすることまでさせていただいた。附属での実習は充実感いっぱいの思い出深いものであった。実は、研究授業の反省会に偶然にも荒尾副学長（当時）がいらして、学芸大でも阿波踊りの連を立ち上げたいという話を伺っていた。そして私の卒業後、学芸大連が発足したのだった。地域の市役所連と一緒に合同チームとして小金井のお祭りで踊っている学芸大学連の衣装を、私は他の連の踊り手として見ていたのであった。

そんな学芸大へ附属養護学校教員として戻ってきたの

だが、私の夢は、幼児児童生徒や保護者、卒業生と一緒に小金井のお祭りで踊ることである。現在は少しずつ準備をしている段階であり、そんな想いを語っていたところ、小金井祭で披露する学芸大連の踊り指導についての依頼の声がかかった。まさか、自分が学芸大の衣装を着て踊れるとは思っていなかったのでも嬉しく思い、喜んで仕事をさせていただいた。与えられた時間は1ヶ月、鳴り物は和太鼓サークルの学生に依頼し、教職員と附属幼稚園児と保護者が一緒になって練習をした。全くの初対面同士がどこまで創り上げることができるのか、自分でも不安に思いながらであったが、当日は緑のトンネルである東門からの通りを澄んだ青色の衣装の踊り手が波のように踊り進んでいく光景の美しさに感動した。また、阿波踊りを通じて人と人とが繋がりに、このような楽しさを共有できたことにも感動した。

学芸大でできることはたくさんあるのだと再確認した。私の夢が実現する日もそう遠くはないと感じている。



キャンパスレポート①

# 昔「サークル長屋」、いま「サークル棟」

北門を入ると左手が陸上のトラック、右手にテニスコートが広がっている。100メートルほど行くと、プール門から東西に伸びる通りに突き当たる。そこを左折するとすぐ右手は「第2むさしのホール」という生協施設。2階建ての食堂などになっているが、その建物と隣り合って、くだんの「サークル棟」（課外活動共用施設）はある。1990年（平成2年）に完成した地上4階建て、2160平方メートルの立派な建物だ。今、大学の文科系、体育系サークルのほとんどはこの建物の中に「部室」を持っている。

古い（昭和年代）の卒業生には隔世の感があるかもし

れない。プール門を入れてすぐの両側と北門を入った左側にいわゆる「サークル長屋」と呼ばれる古びた木造の平屋建てが並んでいた風景を懐かしく思う向きもいるだろう。あの「長屋」はこの「サークル棟」の完成とともにすべて取り壊された。そしてその時のほとんどのサークルはこの近代的ビルディングに引っ越したのだ。自分が所属していたサークルは今どうなっているのだろう、まだ存在するのだろうか、と関心を持たれる人がいるかもしれない。

というわけで、このサークル棟を覗いてみることにしよう。その前に次のリストに目を通して欲しい。

文化系サークル		体育系サークル
ウインドアンサンブル	音楽友之会	陸上競技部（男子）
管弦楽団	ギタークラブ	陸上競技部（女子）
軽音楽部	混声合唱団	硬式野球部
邦楽サークル「白菊会」	モダンフォークソングクラブ	軟式野球部
ラテンアメリカ研究会	和太鼓サークル「結」	男子ソフトボール部
フォークソング愛好会	アカベラサークル「Infini」	女子ソフトボール部
雅楽サークル「東州」	演鑑演劇部	男子硬式庭球部
演劇研究部劇団「漠」	映画研究会	女子硬式庭球部
第三映画会	創作視聴覚文化研究部	男女ソフトテニス部
児童文学研究会「あかべこ」	絵本サークル「きつねのしっぽ」	elf
障害児と楽しく遊び会「おこりんぼ」	国分寺こどもクラブ	蹴球部
地域子ども会活動サークル「むぎのこ」	児童文化活動サークル「麦笛」	女子サッカー部
造形教室「たけとんぼ」	写真研究部	ラグビーフットボール部
美術研究部	漫画研究部	アメリカンフットボール部
放送研究会	E.S.S	男子一般運動クラブ
星空サークル「シリウス」	冒険探検部	女子一般運動クラブ
NEPUTUNE	旅行倶楽部	ワンダーフォーゲル部
環境サークル EKO	キャンパス・クルセード・フォー・クライスト	
総合史学研究会	鉄道研究部	
東洋学術研究部	文学同人会	
人間教育研究会	平和を守る会	
山岳サークル「アンナブルナ」	卓上劇団「ひゅぶのしす」	
民族学研究会	デジタル創作系サークル「SSET」	
教育を考える会@3チャンネル	社会科学理論研究会	

ここに掲げた文科系サークル48、体育系サークル17が、2007年1月現在、サークル棟に入居している団体である。念のために言っておくと、ここに登場するのがサークルのすべてではない。特に体育系サークルの数が少ないのは、多くがこのサークル棟に部室を持たず、体育館など別の施設に拠点を置いているせいである。

サークル活動と言うのは、やや大げさに言えば、大学生活とは何であるかを端的に示すバロメーターであるとも言える。「授業には出ないがサークルの部室には行く」という輩だって少なくないはずだ。

ちょっと古いが1992年版「東京学芸大学白書」の「課外活動の状況」によると在学生の72%はいずれかの団体に所属している・・・と報告されている。文科系、体育系サークルのいずれもその興廃部はめまぐるしく、1、2年の間に消滅していく例も珍しくないと言うが、現在（2007年1月）、大学の学生サービス課に届け出られている団体数は文科系72団体、体育系76団体で、合計148団体というのは全国の大学の中でも学生数に比べてかなり多いのだそうだ。大学の規定ではサークルは代表者2名と顧問教官の署名捺印をもって学生サービス課に届け出ることになっている。つまり2人集まればサークルを結成できるわけで、廃部の届けは特に必要ない。勢い次々にサークルが誕生するということになる。まあ、サークル棟に部室を確保しているサークルはそれなりの組織力と歴史を持っているということも出来るだろう。

体育系サークルでは1992年（平成4年）7月「学獅会」という組織が結成された。他大学では「体育会」とか「体育会連合」とか呼ばれている組織で、体育系サークルの連合組織である。学長を会長に据え、各サークルの代表者が集まって組織されている。ほとんどの体育系サークルはここに参加している。

サークル棟の中には「小金井祭実行委員会」という「団体」も入居している。11月の小金井祭はこの実行委員会が主体になって学生の手で自主運営されるのだが、その委員は毎年、各団体などから選出されることになっている。

サークル棟の外観はなかなか立派なものである。だ

が・・・一歩中に入ってみると・・・。

巻頭の1年生座談会でも話題になっているが、ちょっと眉をひそめたくなるほど雑然と言うか、汚れている。体育系サークルのほとんどはここを部室ではなく「用具置き場」にしているのが実態だというし、文科系の部室はいったいいつ掃除をしたのかと思うほどだ。「自主運営」とは「勝手気まま」「放置」ということではないと思うのだが・・・。

ここに「2006年 東京学芸大学サークルガイド」という小冊子がある。A5版で154ページ。文科系サークルが「音楽系」（14）、「創作・表現系」（6）、「世のため・人のため系」（13）、「エンターテイメント・伝統音楽系」（11）、「リゾート・アウトドア系」（6）、「インドア・研究・宗教・哲学系」（18）の計68団体、体育系が75団体が、それぞれ1ページずつを割り振られて自己PRをしている。新入部員募集を呼びかけるビラの形になっていて楽しい。学生サービス課がまとめて発行したものだ。この冊子からもサークル活動がなかなか活発なようすが伺える。

学生サービス課では、「大学としてもテニスコートなどグラウンドの整備、管弦楽団の楽器購入などに補助をするなど、活動への援助の手を差し伸べている。サークル活動を通じておおいに学生生活を意義深いものにして欲しい」と話している。



新サークル棟

キャンパスレポート②

## ◎ シンボルは？ 時計塔と芸術館

シンボル——象徴……、われらが母校、東京学芸大学のシンボルは何だろう。桜並木、獅子の星座、広いキャンパス、武蔵野情緒、雑木林……人それぞれに言葉や風景などが浮かんでくるのではないだろうか。はっきりいってそれは、「それぞれ」であって、誰しもが共通して「これ一つ」と言って掲げるシンボルがないのも確かである。

そこでやや強引ながら建物に限ってシンボルは何か、と周囲に問いかけてみたら、最も多くの人が掲げたのが「時計塔」であった。確かにかつては正門や東門から進んでくると真っ先に目に入ったのがこの建物であり、昭和40年代の初め頃までは学内のどこからでも見ることの出来た最も背の高い建物でもあった。

現在ではキャンパス内の樹木が大きくなって、時計塔の高さをしのぐ樺の木もあるので、建物のすぐそばまで行かないとそれとわからないほどになってしまった。かく言う私も卒業以来30数年ぶりに学校に来た時には、あの「図書館棟」は取り壊されてしまったのかと早合点してしまったほどである。

でも、ちゃんとあります。近づいてみれば、そのたたくずまいはちっとも変わっておりません。ただし、図書館ではない。「人文科学系研究棟」という看板が掲げられている。

そもそもこの「シンボルタワー」の来歴（設計、建設経緯）がよくわからない。大学の施設課に「小金井団地配置図」という学内地図がある。それによるとこの「人文科学系研究棟」は昭和35年から37年（1960年～62年）にかけて完成したとある。ということは大学キャンパスの小金井統合（1964年4月）に向けて建設されたものらしいことが推察される。

「東京学芸大学二十年史」を開いてみよう。第6章に「附属図書館・研究施設」という項目があって、そこに

次のように記されている。

……昭和35年11月、小金井に新図書館の建築が着工された。新館は、鉄筋3階建て1,765㎡であった。小金井キャンパスの中心に置かれた新館の屋上には木下学長の意向を入れて高い塔が建てられた。

昭和36年4月1日、附属図書館は本館を小金井に移し、世田谷を分館とした。新館への移転は、7月8日に開始し、8月末日までに終了した。9月1日から新館での閲覧業務を開始したが、書庫は未完成であるため、旧書庫を使用した。

昭和37年9月、新書庫が完成し、11月中旬に1階から3階までの書架設備が完成した……。

この記述から、いまやシンボルタワーとなった時計塔は、木下一雄初代学長（在任 昭和24年5月31日～昭和31年10月21日）のアイデアであったことが分かる。またその建設目的は旧師範時代から各校舎に分散していた附属図書館を小金井に統合するためであり、この完成によって16万8700冊の蔵書が一堂に集められることになったという（現在の累計蔵書数は90万冊を超える）。

この図書館もその後手狭になったため、1974年（昭和49年）、現在地（本部棟北側）に3階建て、6242㎡の新館を建てて移転した。図書館の引っ越した後が「人文科学系研究棟」となったわけである。

もう一つのシンボル建築物に「芸術館」がある。前出の「小金井団地配置図」によると、昭和54年（1979年）完成とあるので、28年の歴史である。それ以前の卒業生はその存在を知らない。正門を入れて左手の奥、かつては音楽科や美術科、体育科、家庭科など第4部の事務棟が並んでいたあたりである。2階建て、2,577㎡。



250席を備えたりっぱなホールと展示スペースなどを  
持っている。

この立派な建物の「履歴書」がこれまたつづさには  
分からない。1999年3月に発行された「東京学芸大  
学五十年史」にも、不思議なことにこの芸術館の建設  
経緯に関する記述がまったくない。わずかに資料編の  
第2部「敷地、建物、環境関係一団地整備計画記録」と  
いう一覧年表の中に「芸術館 面積2,577m<sup>2</sup> 金額  
370,000(千円) 着工53,10,17 竣工54,5,31」  
とわずか1行で記述されているのみである。

というわけで、この立派な建物がなぜ建てられたの  
か、誰が立案したのか調べてみることにした。ところが  
難航した。新しい施設とは言うもののすでに30年近い  
歳月が流れ、当時の事情を知る人がほとんどいない。つ  
まりわからないのだ。ようやく当時第4部(音楽、美術  
など芸術分野と体育、産業技術、家庭科などをまとめた  
部署)の学務係長をしていた森俊男氏と接触することが  
できた。森氏の回想によると「芸術館建設の構想は、当  
時第4部長をしておられた笹谷栄一郎音楽科教授(故人)  
の尽力の賜物です。笹谷教授はこの施設の建設計画を本  
当に精力的に進められて、学内の意見を取りまとめ、当  
時の文部省との交渉ごとまでなされた。そしてとうとう  
国立大学としては日本で初めてこのような多目的ホール  
を完成させたのです。日本全国の国立大学のどこにもこ

んな施設はなくて、完成したらみんなびっくりしたもの  
です。特に東京藝術大学は、先を越されたと思ったので  
しょうか、すぐに行動を開始して、学芸大学を先例とし  
てその後、今の芸術ホールを作られたのです」というの  
だ。

最高責任者として建設のゴーサインを出した学長  
は……。当時は第5代の太田善麿氏から第6代の阿部  
猛氏に代わられた時期である。太田氏までの5人の学長  
はすでに故人となられているが、阿部氏は「僕が就任し  
たのは11月。芸術館は僕の就任以前に落成していたと思  
う。したがって計画して完成させたのは太田学長であっ  
たはず。ただ完成後、音響設備に不備があって、僕の代  
で手直しをしたということを感じている」と振り返る。

いずれにせよ、このような芸術ホールは全国の国立大  
学の先鞭であったこと、いまでは学芸大学の誇りの施設  
であることは、長く記録されていいものであろう。

ちなみにこの芸術館は辟雍会も頻繁に使用させても  
らっている。小金井祭期間中に開催する記念行事(昨年  
は記念講演会)の会場とさせてもらっているし、先ごろ  
の1月10日から18日までは辟雍会主催行事として写  
真家・滋澤雅人氏の写真展「縄文の夜神楽」会場として  
使わせてもらった(詳細は46～47ページ参照)。

(①・②とも文責・遠藤満雄)



人文科学系研究棟(旧図書館)の時計塔



全国初の国立大「芸術館」

## 学芸大周辺



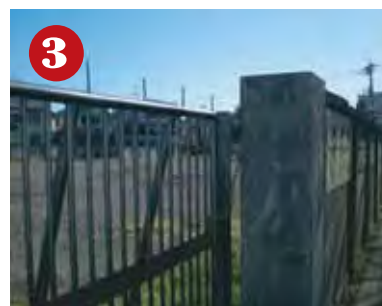
### ラーメン街道

東門を通る新小金井街道は、東門から中大附属高校の前あたりまでラーメン屋が軒を連ねる。今や「ラーメン街道」として有名になった。昼時や休日の夜など行列ができる店もある。



### 小金井市衛生局

東門を出て塀沿いに歩いていくと出現するキャンパスに似つかわしくない光景。これは小金井市衛生局である。小金井市の土地がここだけ入り込んでいるらしい。知らずに通り過ぎていた人も多いのではないだろうか。



### プール跡

プール門の道路を挟んだ向かいには昔、陸軍技術研究所が陸海両用戦車の上陸実験用に作ったという設備があり、それを大学が水泳用プールとして使っていた時期があった。プールは一般的な大きさのものと、それにつながって、戦車が使っていた名残そのままの徐々に深くなっていく傾斜したものがあつた。現在ではすっかり埋められてその片鱗もない。



### ぬくい湯

プール門先の交差点は、そば屋、貫井郵便局、その先には「ぬくい湯」の煙突が今もたっている。部活や合宿でお世話になった卒業生も多いのではないだろうか。今はコインランドリーだけの営業のようだ。

## 武蔵小金井駅周辺



### 商店街へ向かう住宅街

西友裏の商店街に向かう住宅地。この道を通って武蔵小金井駅に出る学生も多い。住宅街は長崎屋まで続き、昭和30年からほとんど変わらない静かで落ち着いた風景が続いている。



### 西友裏商店街

西友裏の商店街には昔からの定食屋やチェーン店などでにぎわう。西友の駐車場ではG類の学大生がパフォーマンスを企画をしたこともある。



## 武蔵小金井駅



### 京王バス駅舎

武蔵小金井から大学の東門まで1 km余り。徒歩で15分程だが、徒歩通学する学生は意外に少ない。“ムサコ”からは京王バスの便がいいということもあるが、実際には国分寺から通う学生が多いようだ。飲み屋も多く、国分寺の方が栄えているというイメージがある。



### 開かずの踏切

現在は線路の高架工事中で駅舎も新しくなり、開かずの踏切としてマスコミで騒がれたこともあったが、常時ガードマンによる管理体制が取られ、安全に運営されている。しかし、この踏切もまもなくなくなるのだろう。



### 北口ロータリー

新宿・立川に鉄道が引かれた明治時代には小金井村に駅はなく、武蔵境と国分寺が最寄り駅で、大正時代になって花見の時期だけ停車場ができたそう。現在の武蔵小金井駅が開業したのは昭和元年。当時は南口しかなく北口は18年後に開設された。

## 国分寺駅北周辺



### 国分寺駅北口

中央特快に乗れば新宿から20分。近隣には大学や高校も多く、学生の街である。特に北口には居酒屋や飲食店が多く、学大生もよく利用している。駅ビル・丸井は何かと便利。



### 早稲田実業高等学校

昨年の甲子園では見事優勝を飾った。国分寺には平成13年に創立100周年でキャンパスを国分寺に移転した。平成14年から男女共学がスタートした。ソフトバンク・王監督の出身校でもある。



### 宇宙活動発祥の地

1955年4月12日に東京大学産業技術研究所の糸川英夫教授を中心に宇宙開発活動の最初の一步となるペンシルロケットの水平発射が行われた。下段の石碑には松本零士の「銀河鉄道333」の絵も刻まれている。

## 国分西



### 万葉植物園

万葉集に詠まれている植物を集め往時をしのぶよすがにと、国分寺前住職の星野亮勝氏により造られた。市の天然記念物に指定されている。現在は約160種類の植物がある。



### 武蔵国分寺

国分寺市に住んでいても意外と訪れたことのない人も多いのでは。敷地内に万葉植物園がある。門は仁王門と桜門があり、西側には国分寺薬師堂もある。



### 国分寺桜門前朝市

国分寺の桜門の前では毎月第2日曜日に朝市が開催され、地元で採れた新鮮な野菜が並ぶ。焼き芋や焼き里芋も販売していた。1月のみ第3週日曜日開催。



国分寺駅南西～南



お鷹の道

江戸時代に、市内の村々は尾張徳川家のお鷹場に指定されていた。それにちなんで清流沿いの小道を「お鷹の道」と名付けた。現在350mほどの遊歩道として整備されている。



真姿の池湧水群

環境庁の全国名水100選、都名湧水に選ばれている。また、周辺は東京都の都市計画国分寺緑地にも指定されている。澄んだ水には蜚やカワニナも住んでいる。飲用の際は煮沸させてから。



殿ヶ谷戸庭園

国分寺崖線の南側傾斜を利用し湧水と植生を巧みに生かした回遊式林泉庭園。季節の移り変わりを楽しむ。(入場料は中学生～65歳：150円 65歳以上：70円)

## メルヴィル島訪問記

— デヴィッド・スミスに誘われて —



「よも出版」主宰  
守屋 敦子  
(1960年 家庭科卒)

### デヴィッドとの出会い

オーストラリアのヴィクトリア州ニーリム・サウス小学校が日本語教育のプログラムを取り入れたのが15年前です。日本文化も含めて初のインターンとして受け入れてもらったのが私でした。その時お世話になった校長デヴィッド・スミスは、同じ学校で17年もの長い間、学校長を務めました。

その間、学校では子どもたちの活躍を映像で記録し、私的には仲間の集まりのカメラマンとなり、そのビデオのダビングなどをして楽しんでいました。3年前に55歳で退職しました。

在職中、訪ねる度に「早くビデオ屋になりたい」と言い続けていましたが、退職後、その夢を叶えて、「デヴィッド・ス

ミスビデオ会社」は順調な滑り出しをしました。ここで同僚や友人たちが「よかったね」と言い、「めでたし、めでたし」で終るところでしたが、実はそうはいかなかったのです。

### メルヴィル島行きのお誘い

1昨年1月のことでした。「デヴィッドが北の島の小学校へ行く」と聞きました。出発の見送りを口実に私は何度目かのオーストラリア訪問をしました。「その学校は校舎の裏の海に行くところとクロコダイルが岸辺に這い上がって来る」と言いながら説明を始め、「もし島を訪ねてくれたら、アソコはその島で最初の日本人になるかもしれない」とも付け加えたのです。



メルヴィル島はニューギニアの南



アボリジニの子どもたちの目が輝いて



自然の中にアボリジニのアートが…



メルヴィル島シャークベイのサンセット

オーストラリアの最北のアボリジニの住む島です。クロコダイルが目の前に現れる、すぐに行ってみたく気持ちが膨らみましたが、反面、かつて訪れたエアーズロック近くで見かけたアボリジニの人々の無気力な姿を垣間見ていたので、躊躇があったのも事実です。仕事の都合で1年伸び、東京からJさん、パースからAさんを誘ってそのことが実現したのが昨年9月のことでした。ノーザン・テリトリー（準州）、ダーウィンで1泊して、いよいよ北の果て、メルヴィル島へ。

### メルヴィル島とは

オーストラリアの地図を広げてみると最北のさらに先に“小さな”島が2つ見つかります。そのティウィ諸島の大きいほうがメルヴィル島です。

“小さな”と書きましたが、それは地図の上での錯覚です。メルヴィル島は南北50キロ以上、東西150キロはあるオーストラリアで3番目に大きい島とか。日本と比較してみると、東京一熱海間が100キロですから、大き目のどこの県を想像出来ます。1,000人ほどがその島に住んでいます。そして我がデヴィッドの仕事先、ミリカピティ小学校のある村落の人口が約500人で、1～7学年までの子どもたちが90人ほど。中学生はダーウィンで学んでいます。

この島はアボリジニ特区。デヴィッド夫人ケイが「島訪問許可書」を島の評議会へ提出済みでした。聞くところによれば、アボリジニ以外の人は、学校の先生や電力発電所で働く人など全部で12～3人とか。

### メルヴィル島へ

ダーウィンの飛行場で体重を量られ、荷物を量られて飛行機に乗り込みました。9人乗りの小さな飛行機です。荷物の

積み込みにバランスを取らねばならないので、重量制限があるのです。これらをバランスよく積むのはパイロットの仕事でした。おまけの話ですが、Aさんの荷物が重量オーバーで、3本のワインがダーウィンの事務所の冷蔵庫へ止め置かれてしまったのです。帰りに受け取って、オーストラリア滞在中にしっかり楽しませてもらったのは言うまでもありません。

プロペラがうなりをあげ、飛行機は一路メルヴィル島へ。座席の前は女性パイロット、隣の席にはアボリジニの女性です。その女性が私に話しかけてきました。「誰を訪ねるのか」の問いに「デヴィッド・スミス」と答えると、「プリンシパル……」という言葉が聞き取れました。デヴィッドは最初担任として赴任して1年を過ごし、今年からは担任をしながら校長もしています。

出迎えの人々の中にデヴィッド夫妻の姿を探しているうちに飛行機は着陸しました。挨拶のハグをしながら、とうとう着いたという実感が込み上げてきました。気が付いて見ると、パイロットが左右の翼の間を動き回って荷物をカートに乗せて、出口まで運んでいます。パイロットは重量チェック、荷物の積み下ろし、人数確認、飛行士と、“何でも屋”なのです。そして気がつきました。飛行場は空港というより田舎のバスの停留所。出迎え、見送りの人以外、空港職員は見当たりませんでした。飛行場の名前はスネーク（蛇）・ベイ・エアポートです。

赤土の道を4輪駆動の大きな車で走って村落へ。道歩く人々に夫妻は手を振り、車を止めて話しかけしながら進みます。大きな亀の甲羅を見せてくれる人、飛び出したワイルド・ピッグ（猪）に「あっちだ」と指さして教えてくれる人など、みんな歓迎してくれているのです。訪問を誘われた時の私の躊躇は、もちろん消えていました。

### いよいよ小学校へ

職員室を中心に、集会をしたり昼食を摂ったりするホール、周りに教室、図書館、少し離れてプレ・スクール（幼稚園）。ここの小学校の校舎の配置は、私の知っているオーストラリアの小学校とあまり変わりません。ただ、アボリジニ・アートが描かれた校舎の外壁を見ることが出来ました。

先ず入った職員室はソファが並んでいます。これもオーストラリアとして当たり前のことですが、日本のとは大違いです。先生たちは休憩時間にはリラックス出来るのです。何処に誰が座るとは決まっています。来客のある時は“椅子取りゲーム”方式で、自分の座るところを確保します。

### アボリジニの子どもたちと

待望の子どもたちとの出会いは、10歳前後の10人ほどの複学年、デヴィッド学級でした。どの子ども目キラキラとしていました。日本の紙芝居よりも大きな本（A2）を1ページずつ繰りながら年齢に合わせて蜘蛛の勉強。能力に合わせて発問したり、記憶させたりしながら、飽きがこないようにするデヴィッドの指導に、子どもたちの1人1人の輝きが見えます。名詞にSを付ける、発音を正すなど、言葉を大事にする何時もながらの丁寧な授業に、私はニーリムサウス小学校を思い起こしながら参観しました。

歌と踊りの授業に誘われ、8～9歳の20人ほどの学級へ。指導者は近くに住むアボリジニの音楽家のアラン。ギターに合わせ、アシスタントの女性の打つ拍子木のような楽器のリズムによって歌う多くがティウィの曲のようで、久し振りに思い切って声を出して歌う子どもたちに出会ったのでした。

突然男の子たちがさっとTシャツを脱ぎました。子どもたちの肌の美しさに見惚れていると、パフォーマンスが始まり

ました。島に住む動物を幾人かずつかで私たちに向けて表現してくれたのです。「ああ、クロコダイルだ」、「これは鳥？」などと思わせるものでした。この地のアボリジニ社会では、今ある自分の前身が各々何かの動物であったと考えるということです。

東ティモール、ニューギニアに近い暑い所です。その上にプールのない学校生活かと思われましたが、初日の午後のデヴィッド学級の水泳の授業でその心配はなくなりました。車に子どもたちみんなが詰め込まれて、行った先は自然のプール、滝です。飛び込む、泳ぐ、木の枝に結んだロープでターザンごっこをする、Jさん、Aさんと違って、さすがに私は一緒に「アーアーアー」とはやりませんでした。映画やビデオで見ただけだった滝壺で着衣のまま泳ぐということ、この年になって体験したのは思いがけないことでした。

### 私の授業

出発前から、ニーリムサウス時代のように「折り紙などを教えて」と言われていましたから、私なりに子どもたちの年齢を考えて準備をして行きました。オーストラリアと対比させて先ず、日本の紹介です。地球儀を取り出して日本を指し示す担任の先生の指先に、子どもたちの目が集まります。折り紙の折り方、うちわや風呂敷の活用など、時間や年齢に合わせての指導、退職後の私にとって、久し振りに子どもたちとの楽しい時間が持てました。

私のこれらの準備は、指導するということより、子どもたちの考える要素をどう入れ、どう引き出すかを重視します。広告紙や新聞・不要になった雑誌の紙などで作る紙ヒコーキ、そしてケイ夫人の希望で加えたボンと音の出る「紙鉄砲」など。大きな音の出し方、長持ちのさせ方など、「紙鉄砲」は子



デヴィッド夫妻



スーパー帰り、途中でおしゃべり



学校の壁もアートで



どもたちに好評でした。

### アボリジニの村落で

この島には学校の公用車以外の車は数えるほどしかありませんから、スーパーへ行く時の足は、営業時間に合わせて村落を廻る小型のバスです。教室も図書室も、教具も本も、朝礼も昼食時も、学校のアボリジニ・カラーが少ないと感じましたが、時間に合わせて出掛けて行ったスーパーも、島の特色があまり見当たりませんでした。魚介類は自給していますから、もちろんありません。食糧、衣料、家庭用品などが並んでいます。お米は山のように積まれていましたから、沢山消費するのでしょうか。スーパーの出入口の壁面は情報交換のために開放されているようでした。

ところで村落を歩いていると「ここは、犬の天国だ！」と思うほど、あちらでもこちらでも犬に出会いました。そのために、ゴミ用の缶は、蓋付きなのはもちろんですが、地面に直接置くことなく、柱やフェンスに括りつけてありました。ゴミはどう処理されているかは知ることが出来ませんでした。空き缶のリサイクルは見えました。村落の片隅に空き缶の集積所があり、山と積まれていました。ビールはほとんどが缶ですから、その量は如何に多いか、空き缶の売り上げが学校に還元されるとのことでした。

### デヴィッドの家で

デヴィッド家の滞在は居心地がよく、まるでリゾート気分でした。マホガニーの太木が中央にある海に続く広い庭、テーブルクロスのかかったテーブル、テラスでのお茶や食事、不便の1つも感じることはないのです。デヴィッドは、本土で行われるフットボールのテレビ中継に興奮しながら観戦し、リラックス出来るチェアでのびのびしながら昼寝もします。学校のことで、また私たちのことでも常に神経を使っているデヴィッドのエネルギーは、これらから生み出されているのでしょうか。

不都合が何かと言われたら、ありました。天井のねずみが・・・、夜中の運動会です。メルボルンに戻ってから行った博物館で見たその剥製の大きかったこと。久しぶりに昔の日本の生活を思い出しました。

### 島民の“楽しみの集い”

島に着いた途端にデヴィッドに注意されたことが2つありました。1つは、「これは絶対ダメ！」と言う、アルコール類を地元の人には手渡さないということです。強く言われました。アボリジニが政府によって保護されていることから、お金を受け取るとすぐにアルコール類に手を出し、依存してしまう。そのために、中毒者が多いとか。外からちょっと来た者に手渡すような機会がある訳がないと思ったのですが、ありました。

ミリカピティ・コミュニティの人々は毎週金曜日に“楽しみの集い”を持つのです。午後5時になって、三々五々、人々が集会所へ足を向けます。道々、子どもたちに会い、覚えてたのティウィ語で「アワナ！（こんにちは）」と声を掛けながら私たちも集会所へ。そこにはビール片手の男たち4、5人ずつががやがやとやっています。「ああ、こんな時が…」と思いながら、私たちもビール片手に小学校の先生やアボリジニの人たちと一時を過ごしました。

ちなみにもう1つのこととは、アボリジニの大人の写真を撮る時の注意。「子供たちは問題ないよ。いっぱい撮ってやる」といいます。相手のことを考えて撮る、これは当然のことと了解したのでした。

### アート・センターで

300年前の1706年、オランダから来た船が、このミリカピティの近くに着いたということでした。つまり、キャプテン・クックよりもずっと早い時期にヨーロッパ人とお互いに顔を合わせていたのです。昨年、300年祭が行われたそうです。キリスト教も入ってきており、デヴィッドの言葉を借りれば「絵やカーヴィング（彫刻）は、ヨーロッパではアートとして高く評価されている」とか。

作品を見る積りで行ったアート・センターでしたが、仕事場まで入ることが出来ました。カーヴィング、リトグラフをはじめ、独特の点や線による絵を描く現場に入り、次の世代に引き継がれていく様子まで見る事が出来たのは、集会所で一緒にビールを飲んで語ったアボリジニのアーティスト、グレン・ファーマーのお蔭でした。島のシンボルであるシーイーグル（うみわし）のリトグラフを1枚手に入れ、大事に持ち帰りました。

### 島で楽しんだこと

デヴィッドとの打ち合わせで、「巻き寿司を作る」ということになったとAさんは巻き簾やお米とともに海苔やかまぼこなどをパースから持ってきていました。何年ぶりかで作った海苔巻き。お皿に盛り付けた巻き寿司を持って、日が沈む西側の海岸シャーク・ベイへ。2台の車に積まれた椅子やテーブルを取り出して並べての“サン・セット・ピクニック”です。

「みんな、2匹や3匹の魚を釣るように」というノルマを持って先ず海釣りへ。結果はAさんの釣ったたった1匹だけでした。ところがその間に、大変なことが起こっていました。折角作った巻き寿司を島の鳥に半分以上食べられてしまったのです。他の食物は、きちんと蓋がしてありましたので、ラップされていたお寿司だけが取りやすかったのです。日本で言えば「とんびに…」ということでしょうか。次第に薄暗くなっていく中で燃やし始めた焚き火のあたたかさに包まれて、ようやくと笑えるようになりました。

その時釣った貴重な1匹の魚は、翌日のスミス家のディナーに十分な大きさでした。

### 日本との関わり

アボリジニについて知るために、又アート作品の買い付けに島を訪ねた日本人は既にいたはずですが、但し、小学校へ行くことが出来た日本人は初めてだったに違いありません。

着任前に会話した「日本人として初めてかもしれない」ということについてデヴィッドが憶えていたかどうかは定かではありませんが、丁度、泳ぎに行った滝への入り口で、「1945年、ここに日本人が2人……」、とデヴィッドが話しかけてきました。この島はニューギニアに近い島ですから、そして1945年ということは、多分捕虜になったのだろうと思いましたが、残念なことにその先の質問の機会が作れませんでした。今考えると、もっとよく聞いておけばよかったと反省しています。

### アボリジニのことに

1945年の日本人のことを聞く機会が作れなかったのと同じように、アボリジニの人々の家のこと、家族のこと、生業のことなど、見たいこと知りたいことが沢山ありました。それを数日で見よう、知ろうとすることは、とても無理なこと

でしたが、エアーズロック近くで持った私のアボリジニへの偏見は、アランやグレン、学校で働くヘルパーなど、何人かとのコミュニケーションが取れたことで消えて、うれしいことでした。

飛行場の傍を何度か通るうちに、「何の意味だろう」と変に思った“We come to the Tiwi I lands M LIK PITI COMMUNITY MELVILLE IS AND”という掲示板がありました。近くに寄ってよくみると、IやAが消されていて、正しくは“Welcome to the Tiwi Islands MILIKAPITI COMMUNITY MELVILLE ISLAND”というものでした。いたずらを、直さずにそのままにしてあったのです。

### メルヴィル島の文化

島からの帰路に立ち寄ったメルボルンの博物館には、ティウイ諸島のアボリジニ文化の展示コーナーがありました。

死者を弔うための盛り土に、カーヴィングをほどこし、絵付けをした棒（トーテムポール？）が数本建てられてあり、メルヴィル島で見えてきた風景の一部が再現されていました。建てられる意味については、博物館の解説とデヴィッドのそれとは少し違っていました。建てる習慣が絵画やカーヴィング、そしてリトグラフの制作に移っていき、現代の作品を生み出していることは事実です。“空飛ぶ法王”と言われた聖パウロⅡ世のメルヴィル島訪問の時の写真も大きく展示されていました。

### 感謝の気持ち

「なるべく沢山の人たちに島へ来て欲しい」というデヴィッドの言葉通り、スミス家に逗留する人々は多く、数週間後にはメルボルンの小学校で日本語を教えているH夫妻も予定に入っているとか。変化に富んだ日々を過ごすことが出来たのは、心広いケイとデヴィッドのお蔭です。そして突然飛び込んだ私たちとの付き合いに、アボリジニの人々、子どもたち、小学校の先生たちやヘルパーへ感謝の気持ちを表したいと思っています。

飛び立った飛行機の中から「インバギー！（さようなら）」とティウイ語で叫んで、メルヴィル島に別れを告げたのでした。

## 学校の抱える今日的課題とは

教育委員

月岡 透

(1962年 保健体育科卒)



大学を卒業して45年。退職して教育委員となり2期目となる。

学校現場では、学力低下や子どもが引き起こす残虐な事件、学級崩壊やいじめの問題など次々と起こる問題に苦慮している。とりわけ、その要因が一人の先生や学校の問題でなく、全ての先生の資質や指導力の問題とする社会の批判が広がり、その苦悩は増すばかりである。しかし、学校教育の成否は現場の先生の力量に負うことが極めて大きい。批判は期待の裏返しと考え、頑張ってもらいたいと思う。

### ○授業参観で感じたこと

仕事柄、研究授業を見る機会が多くなった。中学校の経験しかない私にとって小学校の授業は新鮮であり楽しい。かつて小学校の授業を見たときは、1・2年生の小さな子を飽かせず引き付ける先生の技に感心したり、学年に応じた先生方の指導に敬服したり、板書の工夫や字のきれいさに驚いたり、参考になることが多かった。

しかし最近の授業は、すいぶん様変わりしたように思う。

板書に変わって短冊がべたべた張られ、きれいな字は短冊をつなぐ文字だけ。子どもはそれを一生懸命ノートに写してる。

「先生がこれから、〇〇についてお話します。」半分の子は静かに先生の方の顔を向ける。学級の中はまだざわついていて、「お話を始めます。いいですか。」後ろの二人がまだ話をしている。「そこのお二人さん、先生がお話を始めていいですか。」やっと二人が先生のほうを向いて、先生の話が始まった。

たまたまテレビをつけたら、先生に注意された子が教室を出て行っても先生は注意をしない。「子供の自主性を大切にするため、自分で気持ちが落ち着いて教室に帰ってくるのを待つという約束になっている」という。こんな話が映し出された。

こういう指導が学級崩壊の芽になると思ったのは私だけであろうか。

授業のはじめには、きちんと起立して一斉に礼をする。机を整頓させて出欠をとる。不必要な私語や立ち歩きはその場で注意する。そういうことを躾けることが授業の基本だと思ってきたが、こんな授業は古いタイプになってしまったのか。

### ○最近の課題に思うこと

学力低下の問題が論議され、学力テストや学校選択制が実施されるようになった。子どもや親にとってしっかり教えてくれて、学力を高めてくれる学校や子どものことを考え熱心に指導してくれる先生に期待を寄せることは当然のことである。3人に1人は私学に行くという現実や他校に子どもが行ってしまう実態を嘆く前に、自校の取り組みを見直すことが必要ではないか。

「教師は授業で勝負する」ということを今一度思い起こしてみる時であろう。

いじめの問題も大きな課題である。いじめによる自殺が連続して起こっているが、そのたびに学校の見解は「普段は良い子でした」「学校ではいじめの実態を把握していません」さらには、「素晴らしい生徒たちだから、先生たちがちょっと手を抜いてしまった。」という校長の言葉など全く無責任極まりない話である。

「私たちは一生懸命やっています」とか「一部の先生や学校の問題である」などといっている状況ではないように思う。いじめは必ず起きるという緊張感を持って、日々の活動や学校の取り組みを見直すことが必要ではないだろうか。

「喉もと過ぎれば熱さを忘れず」同じ悲惨な事件が繰り返されないことを願う。

### ○学校のあり方に思うこと

若い女の先生が、自殺したという事件があった。「まじめで責任感の強い先生でした」という記事が載っていた。まじめすぎて行き詰ったのかもしれない。若いときは、熱心に教材研究をするあまり仕込みすぎたり、子ど

もの予想もしなかった発言や行動に戸惑ったり、わけの分からない要求をしてくる保護者との対応に苦心したり、その時々直に直面する課題に思い悩むことが多い。そんな時、適切に指導してくれる先輩や相談に乗ってくれる同僚がいれば不幸な事態にはならなかったのではないかと思う。

現場では教科の指導や学級経営、生徒指導、公務分掌と様々な仕事があり、先生にはこれらの仕事を総合的にこなしていく実践的指導力が求められる。しかし、先生には色々なタイプがあり、得意不得意がある。自分は一生懸命やっているのに、と思う前に同僚として互いに支えあい、教えあい、学びあう明るい職員室づくりに力を注いで欲しいと思う。先生たちを取り巻く状況が困難の時だけに尚更その必要性を感じる。

先生だって職員室が楽しくなければ不登校になるのは当然である。

### ○終わりに

かつて中学校に校内暴力の嵐が吹き荒れ、学校崩壊の

危機に陥ったことがあった。当時は、教師の力量が無い、子どもの気持ちを理解しない厳しい指導が問題だと非難された。そして、厳しい指導から自主性を育てる指導への転換が図られるようになった。しかし、言葉が独り歩きして、放任と我が儘を助長してしまったような気がする。教師の責任は重いと思う。それが親の「言いたいことを言う」ことが権利という風潮を育て、物言えぬ学校が出来上がってしまったのではなからうか。

「子を養いて教えざるは父の過ち、訓（おしえ）導きて厳ならざるは、師の憎（おこたり）なり。」（司馬温公）という古の教えがある。人に迷惑を掛かることはしない、悪いことは悪いという当たり前のことをきちんと指導し、自分のクラスを最高にするという気概を持って頑張りたい。

日々子どもと向かい合い、教育活動を進めている先生方の努力が、家庭や地域の教育力向上の核となり、学校の抱える今日的課題が解決に向かうことを信じて、現場の支援を続けていきたいと思う。

## 鉢こぼれ



株式会社「新企画」出版局  
前島 一雄  
(1964年 社会科卒)

入学したのは60年安保の年。

田舎育ちの18歳がデモ行進にいそしんで、初年度は単位を幾つも落としてしまう。墮ちこぼれの始まりでした。

三年生になって、竹早の附属小学校で教育実習。

休憩時間になると、知能指数のやたらに高い五年生の子供生徒たちに、トレパンが汗だらけになるほどオモチャにされました。狙ったターゲットをからかう習性は小学生から始まるようで、毎年のことのようにでした。

四年で墨田の区立中学校で教育実習。

真面目な女子生徒から、兄への悩みを相談されたのはいいとして、授業が終わると、教室の後方に陣取った三

年の女子生徒達が「先生！日本史教えるより、歌でも唄ったほうが似合うよ」。「でも、背がもう少し高ければいいのに」(大笑)。

教育実習生とはいえ、教師の卵の尊厳が吹き飛ばし思いでした。

かく言う私も「マスコミOB会」のメンバーです。この「辟雍」誌上にすでに登場した永尾和樹氏、田中秋夫氏と同期ですし、辟雍会副会長で現在「マスコミOB会」の会長をしている遠藤満雄氏は、同じ社会科の後輩です。彼らは「Out of bounds」などといいながら不本意ながら教員にならなかったわけではなく自ら飛び出して

いったのですが、私は教員に「なれなかった」組です。

教師は勉強を教えるのが仕事だと考えた浅はかさです。今思えば、勉強を教える前に生徒との接点を深めるのが大切だと気づけば道もあっただろうに、と思いますが、所詮その器量ではなかったわけです。

大学時代は「放送研究会」に所属していて、就職という段になって田中秋夫氏に誘われ、フジテレビのニュースアナウンサー試験に応募しました。男子一名だけ採用という試験でした。どうしたものはずみか、その試験で最期の二人に残ってしまいました。しかし結果は不合格。なぜ落ちたのか、今にして思えば重役面接のこんなやり取りに原因があったのかもしれない。「支持政党はどこですか」という重役の質問に「社会党です」と答えた私。「それなのになぜフジテレビを選んだのですか」とその重役はたたみかけてきます。当時のマスコミ界でフジサンケイグループがどのようなポジションにあるのかわからないわけではないのに、ズバリと急所を付く質問に私は「正直に」答えてしまったのです。

政治と就職。まじめに考えると難しい問題です。

実は教育実習の職員室でも困惑させられたことがありました。

教師は公務員です。教育委員会というクッションがありますが、現実には文部省、今の文部科学省の管理下にあります。

その中で当時も校長を中心とする体制派と体制批判派、そして中間のノンポリ派。区立校ではこの区別が特に鮮明で、もし教師になったら自分はどうするか、けっこう悩ましい問題です。

この原稿を書いている今、教育基本法が参議院で可決されました。でもどの国会議員も納得できる答えは出していないように思えます。

話を私の就職のころに戻しましょう。私の進路はどの道を選んでもOut of bounds＝落ちこぼれでした。結局、新しい広告代理店に就職しました。総員で10名足らず。全員が20代という若い社員ばかりの会社でした。それから44年、紆余曲折はあったものの、わがままいいながら今日に至っています。現在は出版局で演芸関係の専門趣味雑誌の編集に携わっています。その一つに「盆栽世

界」があります。盆栽界では一番歴史の長い雑誌です。

盆栽は今や日本より海外のほうが熱心で、小誌の原版を台湾、スペイン、オランダに貸し出しして翻訳されています。

盆栽協会の理事の方が10年前小誌に連載をしてくれたことがあります。この原稿は遺稿となってしまったのですが、盆栽の真髄を語るものでした。その中で芭蕉の次のような句を引用されていました。

### 草いろいろ おのおのが花の 手柄かな

この句の元の意味をたどると法華経の「薬草喩品」に行き着きます。「草木には高低、大小があるが仏の慈雨は等しく降りそそぎ、それぞれに花を咲かせる」という大意です。

今、盆栽界も大型の盆栽だけではなく、小品と呼ばれる小型の盆栽が人気を集めています。立派な松廼盆栽だけではなく、野山の雑木類や草までがたくさん育てられています。法華経も芭蕉も草木に喩えて、人の生き方を示しています。

これと同じテーマのフレーズがはやりました。

「ナンバーワンよりオンリーワン」

新入生の皆さんも、それぞれの個性を輝かせて、それぞれの人生を歩んで欲しい・・・そんな思いがします。教育もそうあって欲しいと思います。

最期に紹介したい言葉があります。やはり盆栽からのヒントなのですが、盆栽に「鉢こぼれ」という表現があります。「落ちこぼれ」ではありません。「鉢こぼれ」です。

鉢に盆栽を植える時、盆栽の左右の幅よりやや小さめの鉢に納めた方が、樹が引き立つという意味です。このように鉢の幅よりも樹の枝がはみ出す様子を「鉢こぼれ」というのです。これもOut of boundsです。樹が生長したらそれに応じて鉢のサイズを増してあげます。

最近子供の能力以上の要求を強いる傾向が目立ちます。それではいつも不満が残ります。ハードルを少し下げて、自信を持たせながら成長させる。そんな教育はどうでしょうか。

教師になり損ねた落ちこぼれが今になって、盆栽を見ながら教育とは、なんて考えたりして・・・。やっぱり自分も学芸大出身者なんですね。

## 「大学」というところ



京都大学総合人間学部自然環境学科助教授  
瀬戸口 浩彰  
(1988年 大学院理科教育専攻生物修了)

最近では教育の問題が報道で扱われることが多いためか、教育現場は大変な状況である印象を受けます。実際には今に始まったことでは無いと思いますが、とくに初等・中等教育に携わる方々は、教育の現場を取り巻く環境だけでなく、保護者や子供自身が教育の対象として時として困難であることを感じているでしょう。教育者が個人の技量で対処するだけでなく、教育学を専門とする大学が、教育や社会、人間をサイエンスとして、その成果を教育現場に反映させるようなバックアップ体制が必要ではないかと思います。学芸大が今後どのような役割を果たしていく意志であるのか、関心を持っています。

私は卒業後に大学院へ進学して、東京の2つの大学に勤務した後に現在は関西にある大学の教員として大学生・大学院生と接しながら、教育と研究を仕事にしています。二十歳前後から三十路過ぎまでの学部生や院生を迎えては送り出すことを毎年繰り返しています。さすがに博士課程の大学院生になると、職業研究者として育成することを念頭にするために扱いは異なりますが、学生たちが在学中に能力を伸ばして卒業後に社会でその能力を発揮し、一個人としても順調な生活を送ることを願って教育していることには変わりがありません。私はフィールド調査と実験室でのDNA解析等を専門にしている関係で（専門は植物系統進化学）、野外で学生と時間を共に過ごすことも多く、彼らを見ながら自分の同時代のことを思い返します。そんな中でも、自分がかつて受けたほどの教育をキチンとしているだろうかという自省の念があります。

私は理科の生物学を専修する課程に入学しました。卒業後には高校の生物の教師になり、ずっと続けていたバレーボールの部活動の顧問を傍らで務めることをイメージしていました。履修コースにあった様々な実習は楽しみの一つで、特に長瀬・茅野・下田などで行った生物・地学系の野外実習は、クラスの仲間との思い出も重なって懐かしいです。専門の生物学系の実習はとりわけ感慨深く思い出されます。午後1時から始まる実習は時間割

の上では4時半ごろに終わることになっていましたが、私はクラスの仲間とともに夜8時、9時まで残って実習に取り組みました。その原因は単なる「グズ」であったこともありますが、例えば形態学の実習では、観察対象の箇所を機械的にスケッチするのではなく、対象以外の様々なことも調べ、そして生物の構造や機能を堪能しました。「余計なことも見る」ことは実は大切なことで、研究を職業の一部とした今でも、研究の新しいアイデアはこの様な余計な「遊び」の部分から派生することが多くあります。生理・生化学の実習では失敗することもあり、グループの皆で時間を調整して再実験を繰り返すこともありました。レポートは提出の翌週には返却され、論旨や内容はもちろんのこと、「てにをは」までを細かく修正されて再提出を何度も求められました。こちらも段々と意地になり、徹底して参考書を調べた上で、テキストには無いオリジナルな考えも書くようになったと記憶しています。

しかし担当する先生にしてみたら、これは大変な仕事量であったと思います。その後に私が助手として働き始めた大学では、「そんなに丁寧にレポートを見ていては研究時間がとれないではないか」と教授に注意されて、手早く採点だけを済ませることを求められました（その学生たちは、表紙に1～10までの数字が記入されただけのレポートを受け取っていた）。現在の職場に異動したときには、レポートは学生に返却すらしめない習慣であるのには驚きました。大学生のときにお世話になった先生方は、実習や講義に対して多大な労力を払っておられたと思います。何よりも有り難いと思うのは、いま流行の外部評価のように第三者に評価されるからきちんとやるという動機ではなく、自らの方針に基づいて教育をして下さったことにあります。

そして後に研究室に所属して卒業研究を進めることは、現在の私の生活を決定づけることになりました。指導教官の岡崎恵視先生（平成18年度でご定年）のもとで新しい知見を調べていく過程が、たとえ失敗の連続で

あっても、とても楽しいものでした。研究内容が学際領域で、私の研究テーマが先生のご専門とはやや異なることもあり、先生は知らないこと、判らないことは学生の私に率直に「知らない」「判らない」とお答えになり、学外の専門家に連絡を取って一緒に話を聞きに行くこともありました。帰りの中央線の車中で、これからの研究展開を熱く語りあったことが懐かしく思い出されます。先生は知的正直の実践（これは先生と同じ職業を選んで、とても難しいことだと後で悟った）と他研究者との共労の大切さを自身の行動で教えてくださったように思います。先生は学生と同室に居られたので、結果が出るとその場で顕微鏡を覗き込みながら報告をし、意見交換をして頂くことが出来ました。いま思うとこの時期の研究生生活は、職業とした今よりも充実していたように思われます。いまは論文にすることと研究費獲得を前提に研究を組み立てるので、当時に比べると動機に純粋さが欠けているのかも知れません。

講義や実習にしても、研究室にしても、私が受けた教育の恩恵は、ひとえに先生方の人柄と教育に対する思いに拠ると思います。当時の生物学教室の事務室には、歴代の名誉教授の写真の下に「生徒と親と教師のために」と書かれたブロンズの小さな楯が置かれていました。コピーをとりに事務室へ入るときに、この楯を見ては「これがこの大学の心だな」と思っていました。この楯は今もあるのでしょうか。

当たり前のことですが、人の世が続く限り教育は存在します。歴史を振り返ると、例えば明治維新のように世の中が混乱し、あるいは大きく変化するほど、見識のある人々は教育を大事としたように思います。教育は無形の財産です。学芸大が生み出すものは他の大学が目指しているような「お金」につながる特許でも製品でもないでしょう。しかし何にも代え難い、無形の価値を作り続けて欲しいと祈念しています。

## 生き方の原点は学芸大学



アナリスト  
中川 美紀  
(2000年 社会科卒)

### 〈何の為に働くのか〉

現在私は戦略系コンサルティングファームでアナリストという仕事をしています。今の仕事をするようになった経緯について、これから少しずつ振り返っていきこうと思います。

まず私が「仕事」や「働く」ということを意識し始めたのは高校生の頃です。「今後何らかの職業に就いて社会で生きていくのなら、実際人生の大半の時間を仕事に費やすことになる。仕事を選択することは、自分がどう生きていきたいのかという人生の舞台を決めるのと同じ。だからこそ慎重に自分の基準で、一生を通じて本当に望む仕事、やりがいを持って成長できる仕事を見つけたいかなくては」という思いの高まりがきっかけでした。

当時から具体的にこれという職業に対する拘りはありませんでした。ただ自分自身の価値観や職業観をきちんと見極めた上でそれに合致した仕事が見つければ、仕事の中身は何でも良いと思いが強かったように思います。そして何より重要なのは、「自分は仕事に何を求め、どのような働き方をしたいのか」という自分の欲求を知ること。お金や名声なのか、安定や地位なのか、それとも自己実現やプライド、社会貢献の高さなのか…。私自身、幾度となく自問自答を繰り返しました。

そしてその結果、自分という人間は人の為になれることに幸せを感じ、フェアで誠実であることに拘って働きたい、という抽象的でシンプルな答えに行き着きました。逆に言うと、自分は俗物的なものにはあまり興味がなく、

むしろ自分が実感する豊かさや描く幸せな人生とは、「真理」や「善意」といった普遍的な価値に根ざして存在するものなのだということがこの時確信できたように思います。まさにこの発見が、その後の私の職業選択の原点であり、自分の人生の軸となりました。

### 〈教師の存在〉

その後、自分の価値観を反映した職業にはどんなものがあるかと具体的に探していくうちに、自分の頭に真っ先に浮かぶのが教師という職業だということに気づきました。

生徒と誠心誠意向き合い子供の成長に関わる責任のある、そして利他的な動機と非経済的な価値に報酬がある仕事。教師は、まさに私の価値観に合致した理想的な職業でした。

身近に感じた理由の一つには、私自身が素晴らしい先生達との出会いと交わりを経験し、それが自分の人生の歩みの中にしっかり刻まれていることを感じていたからだと思います。

また教師であった父の影響も多分にあると思います。教育に邁進する父の姿。そしてその父の口癖は「生徒と本気で向き合うが故の苦悩はあるが、笑顔や成長に繋がった時の喜びは何にも代え難いもの。教師をやって良かった。教師って素晴らしい仕事だな、と感じる最高の瞬間なのだ」というものだった。教師であることへの誇りと使命感を持ってひたむきに自己研鑽する父のこのリアルな姿と言葉、そして良い先生達との出会いと交わりの実感の二つによって、私は教師という職業をより身近に、その魅力とやりがいをリアルに感じていたのだと思います。

### 〈学芸大学で教えられたこと〉

こうして教職に魅了された私は、伝統ある学芸大学に進み充実したカリキュラムの元で学びます。高めあえる仲間との出会い、そして教育の道を究める為の最高の環境が整った学芸大学で学べたことは、私の人生の財産となりました。そして4年間色々な教えを受けた中で、全ての教えの根底であり一番重要な教えは、教師は公益へ

奉仕するというプロフェッショナルとしての使命感と自覚を持ち、確かな専門性と豊かな人間性、そして高い倫理観を有していなくてはならないこと、そして生涯学び続けなくてはならないこと、という心構えと厳しい掟の存在にあったのではと感じています。そして徹底的に叩き込まれたこの教えこそ、まさに普遍的なプロフェッショナリズムそのものなのだと思います。

### 〈プロフェッショナリズムの追求〉

卒業後、現在のポストである経営コンサルタントの波頭亮氏との良き出会いがあり、私は結局コンサルティングの世界へ飛び込みます。教育の世界とコンサルティングの世界、確かに全くの畑違いのように思いますが、プロフェッショナリズムの追求という点では同じです。つまり、自分の儲けではなくクライアントの利益に貢献し公益への奉仕をすること自体が仕事の目的であること、また社会からの敬意や自尊の念といった非経済的なものが最大の報酬であるということ、それは私自身が職業選択の上で最優先する価値観そのものでした。また波頭氏がそれをビジネス界という非常に成立し難い世界で本気でストイックにやっておられることに大変な敬意を抱き、迷わず入社することになりました。

実際のコンサルティングの仕事は、よく医者に喩えられます。医者が患者の病気の原因を突き止めて最適の処方箋を書くように、コンサルタントはクライアントに対する見立てと、問題解決する為の戦略の策定や組織の設計が仕事です。また医者と同様、プロフェッショナリズムを支えるものとしてまず求められるのは高い倫理観とプロ意識です。私自身、企業の命を預かっているという自覚と誇りを持って、ひたすらクライアントの為に自己研鑽しなくてはならないと戒める毎日です。

最近の私の仕事は情報収集や分析に限らず、波頭氏の著書のコンテンツ作りや執筆を行うことが増えました。その中で先日「プロフェッショナル原論」という著書を作り上げたのですが、私自身これはとても意義のある本だと思っています。現在日本社会ではプロフェッショナリズムが成立しにくく、極端に経済の価値だけが肥大化してしまっているのが現実です。それにより耐震強度偽



装やライブドア粉飾決算事件を始め、本来倫理観の高いはずのプロフェッショナルによる不祥事も頻発しています。このプロフェッショナリズム崩壊の危機に、教師、コンサルタント含めたプロフェッショナルの仕事の魅力と自信を取り戻して欲しいとエールを送ったものなのですが、一人でも多くの読者に力と勇気を与えることがで

できれば嬉しく思っています。そして本来人間は公益に奉仕することの喜びや充足感、またそういう仕事を通じて得る自尊の念や社会からの敬意といった非経済的価値によって最高の幸せを享受できるのだということを信じて、私自身今後も良い仕事に取り組んでいきたいと思っています。

## 教養系第1期生挑戦記

— コオロギの研究から海外 MBA に挑戦するまで —

(株) 富士通総研 シニアコンサルタント  
**木島 正博**  
(1992年 J類情報環境科学課程卒業)



私は1992年に教養系第一期生として、J類自然環境科学専攻 生命科学選修を卒業し、富士通(株)にSEとして就職しました。その後、33歳でオランダ・エラスムス大学ロッテルダム経営大学院に妻と子供二人(当時3才と1才)を連れてMBA(経営学修士)留学しました。現在はシンクタンクの(株)富士通総研に経営コンサルタントとして勤務しています。

### 学芸大教養系第1期生

『何か新しいことを始めようとしていて面白そうだ』というのが、教養系を受験したきっかけでした。生命科学選修の同期8名と新カリキュラムを通して新たなことを学び、3年次には厳しい指導で有名だった藍先生の神経生理学教室に所属しました。研究はまず実験材料のコオロギの全体像を描くことから始まり、各部位の観察、そして神経の働きへと進みました。この最初に全体像を描くということは、後にMBA大学院で企業分析をした際に『最初から各論に入るな。まず大きな絵を描け』と指摘され、思わぬところで研究室時代を思い出すことになりました。

### 会社員生活の悩みと転機

富士通に入社後は製造業のお客様のシステムを担当する部署に配属となり、プログラム作成を担当しました。

当時の職場は泥臭い現場密着型で、仕事は見て憶えろ式。それは入社前に抱いていた知的なイメージからは程遠いものでした。私は幻滅し、一時は会社を辞めようかと真剣に悩みました。

しかし、あるとき『海外で仕事がしたい』と英語の勉強を続けていたことが転機となりました。私の英語力を知った上司から英文資料の翻訳を依頼され、その翻訳資料を読んだ幹部が私を海外担当部署に引き抜いて下さいました。以来、アジア、欧米に何度も出張し、様々な国で仕事をするようになり、仕事内容もIT導入からその先の経営改善まで広がりました。その過程で経営者に対し、より説得力のある提案をするためには自分の実力が不足していることを痛感し、企業経営を体系的に学びたいという思いを強くしました。

### 海外MBAへの挑戦

ある時、社内に海外MBA派遣制度があることを知りました。海外の大学院で経営学を体系的に学べ、また世界のエリート達とネットワークを構築できるという、それは私にとって願ってもない制度でした。しかし、大学院入試ではTOEFLとGMATの2つの英語能力試験の高得点取得、更には英文履歴書、長文の英文エッセー作成、英語面接と超えるべきハードルが数多く立ちはだかっていました。

当時30才を越えていましたが、ぜひ留学したいと社内募集に応募、書類選考と面接を経て、運良くその年の候補生2名の内の1人に選ばれました。それからは、昼は仕事、夜は予備校に通い寝る間も惜しんで受験勉強をし、1回の受験でオランダと米国両方の大学院に合格することができました。

### オランダの大学院を選んだ理由

日本で語られる『グローバルスタンダード（国際標準）』とは、実際は『米国スタンダード』では、と常々感じていました。イギリス出張中に起きた9.11テロでは、米国の過剰な反応と、対して欧州の冷静な対応を目の当たりにしました。そのような経緯から、欧州の考え方を学びたいと思うようになりました。

オランダは九州ほどの小国ながら、EU発足の中心的な役割を果たし、ハブ空港のスキポール空港と、世界有数の取扱高を誇るロッテルダム港を擁し、文字通り欧州大陸の拠点となっています。国民の多くは3ヶ国語以上を操り、ワークシェアリング先進国で、近年は出生率が向上している。この日本と対照的なオランダに住み、勉強することを選択しました。

私が留学したロッテルダム経営大学院は約40カ国から留学生が集まった国際的な環境で、彼らの前職も会社員、起業家、医者、軍人など、これまた多種多様でした。講義は議論中心で、私が日本の大学のようにノートを取ろうとしていると、「議論に参加しなさい」と注意されました。成績の2～3割は、議論への参加度で評価され、

しかも議論を発展させない発言は減点対象。毎日数十ページのテキストと参考文献を予習し、且つ発言内容に頭を悩ませる。講義後は思うように発言できないと落ち込む間も無く、復習と次回の予習と勉強漬けの日々でした。

同時に、家族の生活立上げも大変でした。家探しから、日々の買い物、子供の学校生活など多くの苦勞がありましたが、一方でオランダ人の生活や文化を深く知る、またとない機会となりました。

### そして、これから

2006年3月にMBAとMBI（経営情報学修士）を同時取得し帰国後はシンクタンクで主に企業戦略、リスクマネジメントを担当する経営コンサルタントとして新たな一歩を踏み出しました。

新しい世界に一歩足を踏み入れると、その先にまた新たな世界への道が見えてくる。私の新たな挑戦を続ける生き方は、学芸大教養系に1期生として入学したことに始まっているのかもしれない。



ロッテルダムの街角

## 学芸大学に学んで

— 臨床心理今昔 —

私が東京学芸大学教育心理学教室の助手として採用されたのは、昭和50年（1975年）のことでしたから、もう30年以上も前のこととなります。学部時代の4年

間も小金井で過ごしましたから、本学には本当に長い間にわたってお世話になってきました。

私が就職した当時、我が国の教員養成系の大学には珍

付属学校運営参事（教育心理学講座）  
**松村 茂治**  
（1970年 教育心理卒）



しく、本学には「臨床心理学」を看板に掲げる分野があり、品川不二郎先生、藤原喜悦先生、福島脩美先生が学部生、大学院生の指導に当たられていました。分野は異なりましたが、河井芳文先生（故人）は、学校での勉強を苦手に行っている子どもたちを対象にした「学習ドック」を主宰し、上野一彦先生は、その後大きな展開を見せることになる学習障害のある子どもたちへの実践的な研究を行うなど、教育臨床を学ぶには格好の場となっていました。

就職して間もなく、分野としての臨床実践の場を確保するために、土曜日の午後、研究室を開放しプレイルームを整備して、教育相談活動を始めることにしました。臨床心理士や学校心理士の資格などない時代だったとはいえ、知識も経験もほとんど持たない学部学生や大学院生を、子どもへの指導や保護者への対応、学校訪問などに積極的に関わらせたのですから、ずいぶんと思いついたことをやったものだと思います。

今と同じように、心理臨床に関わりたいという学生は大勢いましたが、臨床を取り巻く状況は今とはずいぶんと異なっていました。

相談室の開設を知らせるために、近隣の市の教育委員会に挨拶に伺いましたが、けんもほろろとは言わないまでも、それほど歓迎はされていないという印象を持ちました。教育現場には、教育相談という仕事は、校長・教頭クラスのベテランが携わるものといった雰囲気がありましたし、学校での問題が外部に知れるということには、今以上に大きな抵抗感があったように思います。

当時、教育委員会でも大学の相談室でも、対応していた問題の大半は登校拒否の問題でした。ただし、この問題は、増え始めたとはいえ、まだまだ「市民権」を得るまでには至っていませんでしたから、来談した子どもの学校での様子を知ろうと学校訪問をしても、「学校には来ないで、大学には行ってるのですか？」とか「怠けているんでしょ。あそこの親は甘いから・・・」といっ

た言葉か返ってくるが多かったように思います。いや、そうした言葉が返ってくるのは良かった方だったのかもしれませんが。受け付けた事例のうち、半数以上の保護者が、学校には内緒で相談に来ているので、学校には連絡しないで欲しいと訴えていたものでした。

保護者の中に内密にしておきたいという気持ちが強かった時代とも言えますし、学校の壁が高くかつ厚かった時代ということもできると思います。学校現場には、以前から「落ちこぼれ、落ちこぼし」の問題があり、登校拒否に続いて、校内暴力や「いじめ」そして学級崩壊と次々に新たな問題が出現し、対応が迫られてきました。

こうした問題に対処するため、平成7年度から、全国の学校にスクールカウンセラーが導入され始めました。期間限定の調査研究としてのスタートでしたが、もう10年以上の実績があるわけです。スクールカウンセラーは非常勤扱いですし、すべての学校に行き渡っているわけではありませんが、教員以外の人間が定期的に学校現場に介入するようになったということは大きな状況の変化でした。

そうした変化を反映してのことなのでしょう、最近、多くの学芸大生が、学校ボランティアとして学校に入り、特別な教育的ニーズのある子ども（必ずしも発達障害のある子どもばかりではない）への支援に携わるようになってきました。中には、10人以上の学生が関わっている学校もあると聞きます。30年前、私が相談活動を始めた頃には、考えられなかったことです。学校が外部に対して開かれるようになった結果だとすれば喜ばしいことと言えますが、学校の中で多くの問題が出現していて、スクールカウンセラーだけでは対応しきれないということでしたら、喜んでばかりはいられません。

もしそういうことなら、もう一肌脱いでという気持ちがないわけではありませんが、フットワークもヘッドワークも昔のように働かず、バトンタッチの頃かと思うこの頃です。

## 歴史散歩——源流を訪ねて

「温故知新」——「故（ふる）きを温（たずね）て新しきを知る」……。随分古めかしい言葉です。また四文字熟語として言い古されてもいます。でもあえてこの言葉を掲げましょう。東京学芸大学の歴史も随分と故（ふる）くなりました。1949年（昭和24年）、「大学」という名称になってからでも今年58年の歳月を数えたこととなります。今年入学の諸君は3年生になるときに、大学創立60周年を迎えることとなります。

東京学芸大学はその創立の前に「前史」があります。いえ、前史という言い方は正確ではないかもしれませんが。その源から数えると、大学創立以前に68年もの歴史があります。大学の歴史よりもその「前史」の方がまだ長いのです。その前史とは「師範学校の時代」です。

「師範」という文字は現代ではほとんど日常生活から消えさせました。せいぜい書道や茶道、舞踊など伝統的技術。芸能の世界で辛うじて残っているくらいでしょう。一昔前までは「師範」とは「旧弊な」とか、「犯罪的な」とか、「唾棄すべき」とか、否定的な形容がついて表現されたこともありました。「師範学校」＝「軍国主義教育」と短絡させて考えられたからです。

でも、果たしてそうでしょうか。まさに「温故知新」です。故きを訪ねなくては今日が分かりません。わが東京学芸大学の「故き」、つまり師範学校のルーツを温めて見ることにしたいと思います。

まずはその師範学校の跡を訪ねてみましょう。

報告・遠藤 満雄（1968年社会科卒 辟雍会副会長）

東京・原宿一表参道。今日の日本では最先端流行の発進地帯……。今や日本に限らず、世界中にその名の知れ渡った名所です。

表参道とは明治神宮に至る参道を言うのですが、その明治

神宮の大鳥居を背にして東に向かうと、一キロ余りで国道246号、通称青山通りに突き当たります。その青山通りを左折し、赤坂方面にわずかに行った左手に「善光寺」というお寺の伽藍が見えてきます。この伽藍はわれわれの先輩たちにとっては、忘れられないものであったと思われる。というのはこの善光寺のすぐ隣が広大な「青山師範」の敷地であったからです。

この元青山師範の敷地に現在は25棟もの都営団地が建っています。その都営団地の敷地に入ってみます。

ありました。「青山師範学校の跡」と刻まれた立派な記念碑が建っているのです。読んでみます。

——明治三十三年我等の母校がこの地に建てられ大正を経て昭和十一年に至る三十六年の間、正大とまじめの校風のもとに師範学校および附属小学校から多くの人材を輩出した。

母校は世田谷に移り、なつかしい校舎はやがて戦災を受け灰燼に帰して昔をしのぶ何物もなく、年ともに感慨に堪えない。学制頒布をみて百年、今や記念碑建設の念願がかない我等の喜びを後世に伝える。

千九百七十二年十一月三日

東京府青山師範学校卒業生

同 附属小学校卒業生



青山5丁目にある青山師範跡の碑

世界最先端を誇る表参道のさんざめきから1キロも離れていないこの地に、我らが母校のルーツを示すこんな石碑が建っていたのです。碑文を読み終えて顔を上げれば、都営団地はあくまでも静かで、まるでエアポケットのようなたたずまいです。碑文にあるように「昔のしのぶよすが」は何もありませんが、70年前までここで学んだ先輩たちの姿が浮かんでくるようです。

1970年（昭和45年）3月に発行された「東京学芸大学二十年史」の第二編に「師範学校78年史」が収められています。この師範学校史をひも解いて見ましょう。その序章は次のように書き出しています。

東京学芸大学は、昭和24年5月31日東京第一師範学校（男子部・女子部）、東京第二師範学校（男子部・女子部）、東京第三師範学校および東京青年師範学校の4師範学校を統合して成立した。そのうち第一師範学校男子部の前身は東京府青山師範学校（明治41年改称以降）であり、またさらにそれは東京府師範学校（明治31年4月改称以降）、東京府尋常師範学校（明治19年4月師範学校令により20年改称以降）、東京府師範学校（明治9年12月以降）、東京府小学師範学校（明治9年3月改称）、東京府仮師範学校（明治8年6月改称）、小学教則講習所（明治6年4月設立）と、その源流をたどることができる。……

東京第一師範学校女子部の前身、東京府女子師範学校が小石川区竹早町に設置の府告示があったのは明治33年2月（授業開始9月）であり、東京第二師範学校男子部の前身東京府豊島師範学校が北豊島郡巣鴨村大字池袋に設立されたのは明治41年11月（開校42年4月）、東京第三師範学校の前身東京府大泉師範学校が板橋区東大泉町に設置の件が府告示されたのは昭和13年1月（開校4月）であった。また、東京青年師範学校は、その源流を東京府立青年学校教員養成所（昭和10年4月）、東京府立農業補習学校教員養成所（大正10年4月）、そしてそれはその前年大正9年4月東京府立農業教員養成所として西多摩郡青梅町の府立農林学校に附設創立という

ふうにならぬ源流を求め得るのである。

そしてこれら東京第一（男子部・女子部）、東京第二（男子部・女子部）、東京第三、青年の各師範学校はすべて昭和24年5月東京学芸大学に包括されるとともに、なお以後2年すなわち昭和26年3月まで存続して同年同月一様に廃止された。……

今、訪ね来た「青山師範学校跡」とは、この沿革が語るように、東京学芸大学として再出発するまでは「東京府第一師範学校」と呼ばれていたものであるのです。記念碑にある如く明治33年（1900年）に小石川区（現豊島区）竹早町からこの地に移ってきて、その地名から「青山師範」と呼ぶようになったものでした。その「青山師範」は36年間同地にあったのですが、昭和11年（1936年）世田谷区下馬の地に移転しました。現在も附属高等学校がある場所です（当初は附属小中学校もあった）。この地は東京学芸大学となってからも昭和39年（1964年）3月まで「世田谷校舎」として存続していました。このゆかりから東急電鉄はいまだに「学芸大学前」という駅名を残しております。

ついでながら青山師範が下馬に移転した跡、校舎は府立第15中（現青山高校）として使われていましたが、太平洋戦争末期の東京大空襲で跡形もなく燃え尽きました。そして戦後すぐ、その敷地は東京都の手で、戦後復興のための住宅建設の敷地に転用され、今あるような「青山住宅」が建てられたのでした。東京都住宅整備局の話によりますと、同地に住宅が建ったのは昭和20年。新宿区の戸山ハイツと並ぶ東京都による共同住宅建設の草分けだったそうです。当初は一棟2世帯の木造平屋64棟が建ち、昭和32年に鉄筋4階建てのビル25棟に立替えられたそうです。

いままじ「二十年史」にある師範学校沿革を跡付けて見ましょう。その青山師範の源流は、明治6年（1873年）4月に設立された「小学校教則講習所」まで遡ることができる、とあります。ご承知のように徳川幕府を倒した明治維新政府は、朝廷を京都から江戸（東京）に移したのを皮切りに、次々と近代国家建設のための施策を打ち出します。その近代化政策の要諦の一つが教育制度の整備でした。明治5年には、

東京一横浜間の鉄道開設と前後して「学制頒布」をします。学校制度を維持していくために最も重要なのは、その教育に携わる教員の確保、養成です。そして翌明治6年4月にはその教員を養成するための「小学校教則講習所」が開設されたのです。

その「教則講習所」というのは、学制の頒布とともに全国各地に設置されることになるのですが、東京では全国の模範として、麹町区（現千代田区）内幸町の府庁構内に設置したのでした。明治9年には同所に新校舎を落成させ、「東京府師範学校」とその名称も変えたのでした。

この内幸町の東京府庁があった場所は、現在では日比谷公園内にある都立日比谷図書館、日比谷公会堂のあたりです。つまり東京のど真ん中、日比谷公園が、わが母校の発祥の地というわけです。

明治から大正、そして昭和前期（太平洋戦争終結まで）の師範学校制度の変遷は、かなり複雑なものですから、ここでは割愛します。ただ、内幸町、日比谷公園内を「出生地」とする師範学校はその後、明治21年（1889年）に小石川区の竹早に移転します。ここに新校舎を建設したからです。現在、大学附属の竹早幼稚園、小学校、中学校のある「竹早」です。名称こそ「東京府師範学校」、「東京府尋常師範学校」などと幾たびか変わっていきませんが、前述の「青山師範」のことです。竹早にあった師範学校は、前述のように明治33年（1900年）に北青山に移転して行きますが、その跡には「女子師範学校」が開設されました。その「女子師範」は後に東京第一師範学校女子部となりますが、日本の女子教員養成学校の始めでした（お茶の水女子大の前身である東京高等女子師範学校はまた別の歴史をたどる）。

この竹早については、ほぼ昔どおりの敷地に今も大学関連の施設（附属学校）が建っているので、今回の「散策」からはとりあえず省きましょう。

竹早校舎の前を通り過ぎ、池袋に出ます。明治41年（1908年）11月に東京第二師範学校（豊島師範学校）が、豊島郡巢鴨村池袋に設立されたとありますから、その場所を確かめてみるためです。豊島師範が開設された明治41年は日露戦争から3年後、池袋の一角はまだ東京区内ではなく、

豊島郡と呼ばれていました、しかも巢鴨村の「大字」であったわけです。まだ山の手線も開通しておらず、まさに武蔵野の田園地帯だったのです。そんな「僻地」に忽然と近代的な師範学校の大伽藍が立ち並んだのです。いったいその跡地は現在どうなっているのでしょうか。

なんと、なんと、その敷地は池袋駅の西口すぐそばだったのです。「東京芸術劇場」・・・東京の、いや日本の芸術活動の一大拠点であるこの施設の敷地こそ、かつては「豊島師範学校」（第二師範学校）と、附属小学校などがあった場所なのです。

東京芸術劇場は平成2年（1990年）10月の開場です。1万3000平方メートルを越える敷地に地上10階、地下4階、2000席の大ホールに中ホール、小ホールなどを供えた大劇場で、総工費320億円を投じたといえます。この敷地はほぼそっくり第二師範学校の敷地でした。

地下鉄を降りて地上に出ると、否が応でも東京芸術劇場の威容が眼に飛び込んできます。その大劇場に向かって歩いていくと、劇場前はかなりゆったりとした広場になっています。この広場は東京には貴重な空間で、お祭りや様々な市が立ちあがっています。

そのほぼ中央に少しばかりの木立ちがあって、夏は涼しい木陰を作ります。その植え込みの中に「東京府豊島師範学校同附属小学校発祥の地」と記した石碑が建っています。撫子の校章が緑青色に輝いています。その石碑の裏を見ると、次のように記されています。

- 明治四十一年十一月 東京府豊島師範学校設置告示
- 明治四十二年四月 此の地に校舎新築・開校
- 明治四十四年四月 附属小学校開設
- 昭和十八年四月 東京第二師範学校と改称
- 昭和二十年四月 空襲により附属校舎を残して全焼
- 昭和二十二年一月 本校小金井の地に移転
- 昭和二十四年五月 東京学芸大学に発展し附属小学校は附属豊島小学校と改称
- 昭和三十九年三月 豊島小学校小金井に移転
- 昭和四十八年三月 建之  
豊島師範学校同窓会 撫子会  
同附属豊島小学校 同窓会

この碑文で分かるように現在の大学小金井キャンパスは、この豊島師範の移転先がその源流であったのです。キャンパス内にある附属小、中学校の校章である「撫子」は、豊島師範の校章でもあったのですね。

もう一箇所訪ねてみたいところがあります。本郷です。本郷通りを東京大学の赤門を右手に見ながら北に歩きます。地下鉄南北線の東大前駅のまん前に「文京第六中」という中学校が見えます。この中学校が目指す場所です。いえ、中学校そのものに用事があるわけではありません。その中学校前に平成元年11月に文京区教育委員会が建てた「追分尋常小学校跡」と記した案内板があります。

明治36年（1903）2月、この地（旧駒込追分町）に「東京追分尋常小学校」が設立され・・・翌37年1月授業を開始した。・・・昭和20年（1945）3月、「東京第二師範学校附属国民学校」に移行。昭和27年（1952）「東京学芸大学附属追分小学校」と改称される。昭和36年（1961）、「同附属竹早小学校」に合併、閉校。その後校舎は「文京第六中学校」となり今日に至る。

と記されています。この地もまたわが母校にゆかりがあるのです。この案内板では尋常小学校、国民学校、附属追分小学校と名称が変更された経緯は分かるのですが、この説明だけでは不十分です。そもそもここは第二師範学校（豊島師範学校）の女子部のあったところなのです。

第二師範（豊島師範）に女子部が設置されることが決まったのは太平洋戦争さなかの昭和18年12月でした。翌昭和19年4月に開校し、本科180人、予科80人を迎えて入学式が行なわれました。しかし、1年余りで日本は敗戦を迎え、昭和24年には新しく学芸大学となって、「追分校舎」と呼ばれるようになりました。その追分校舎も4年後の昭和28年3月には廃止されたのでした（附属小学校は昭和36年まで存続）。

振り返ればわずかな歴史かもしれませんが。しかしその敷地にしか面影をとどめないこの地もまぎれもなく、わが母校の水源の一つなのです。

樋口一葉の桜木の家や菊坂の家もすぐ近くです。石川啄木や宮沢賢治などのゆかりもあります。何しろ東京大学のまん前なのです。東京文学散歩、歴史散歩をかねてこの「追分校舎」の跡も訪ねてみて下さい。ちなみに「追分」とは中山道と日光御成街道がここで分岐したことから名付けられた地名です。

第三師範学校は大泉です。今も付属小、中学校があります。大学の男子寮もあります。また青年師範学校というのは、戦前の特異な教育制度の名残です。小学校から中学校（旧制）、高等学校（旧制）から大学へという、いわゆるエリートコースから外れた、外れざるを得なかった青年たちに中等教育を施すための青年学校・・・、いまで言えば実業学校の一つなのですが、いわゆる勤労青少年のために開設された教育機関の教員を養成したのが青年師範学校でした。前述の沿革に西多摩郡の青梅町からスタートしたとありましたが、その後、調布市に移転しました。現在、東京天文台があるあたりです。大学からも近いので、ここも訪ねてみては如何でしょうか。

ざっと「源流散歩」をして見ました。師範学校は歴史の彼方に去ろうとしています。青山、豊島など旧師範学校の跡地に記念碑を建てた「同窓会」も卒業生が次々に亡くなって、消滅しかかっていると聞きました。新入生の皆様、そして卒業生の皆様も、是非とも源流を訪ねてみて下さい。



「第二師範」跡に芸術劇場が。

## “お宝”(heritage) 細見



学芸大図書館貴重資料「明治期の絵双六」復刻版を製作しました

### ○香朝楼国貞画「小學尋常科高等科修業壽語録」

明治二十四年 復刻版 ¥1260 (税込み) ISBN 4-901665-06-5 C1637

### ○川端龍子画「二十四時家庭双六」

明治四十五年 復刻版 ¥1260 (税込み) ISBN 4-901665-07-3 C1637



復刻版には利用者が絵双六の価値や遊び方が理解できるように、絵双六に書かれた文字部分を翻刻した資料と解説文を添えており、江戸時代から明治期にかけての文化や生活を知り、かつての子どもたちの遊びを追体験することができます。

#### ご注文先

辟雍会 (東京学芸大学全国同窓会)

電話 042 (321) 8820

東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学構内辟雍会事務所



東京学芸大学附属図書館は、開設以来市民に開かれた図書館をめざして参りました。近年では卒業生には特に図書館資料の貸出もしており、現職教員、卒業生の皆様にも大変重宝されているところです。図書館の開館時間も長く、朝は8時30分の勤務時間開始と共に開館し、夜は22時までと、スタッフの献身による暖かいサービスが続いております。

さて、図書館のお宝といえば、数あるコレクションの中でもここ3年連続「図書館所蔵資料展示会」で紹介されている双六コレクションがまず挙げられます。この双六コレクションは近代庶民教育資料として1985年度の大規模コレクションで購入されたものです。当時はちょっと風変わりなコレクションということで話題になりましたが、最近では図書館ホームページの充実によりコレクションの掲載画質も向上し、アクセス数の増加が日々目立ち、双六コレクションの存在が図書館のユニークなコレクションとして評価されており、民間での利用も活性化して参りました。とくに昔のこども遊びとして、あちこちのイベント会場で双六をコピーして遊びの体験をしているようです。ときには月刊誌の付録として取り上げられたり、テレビの番組にまで出演したり、ちょっとしたスターのようです。

平成17年度には「東京学芸大学附属図書館双六コレクション」として双六を復刻し、新聞紙上にも取り上げられるなど話題になりました。その時復刻された双六は2種で「小学尋常科高等科修業書語録」と「二十四時家

庭双六」でした。双六は一般に美しくわかりやすい図柄に人気が集まるようですが、じっくり読んだり見たりしていると、何とも思わず唸ってしまったり、声を出して笑ってしまったりと、さすがに庶民教育資料だなと感心するところです。

また、東京学芸大学といえば教育のプロには忘れられないコレクションがあります。これは望月文庫、松浦文庫として保存されていますが、中でも望月文庫は江戸時代の庶民教育に教科書として広く使われていた往来物を多数含んでおり、「稀覯往来物集成」（大空社、全32巻）には8冊も取り上げられ、図書館の本当のお宝として君臨しております。

加えて、現行教科書等を含む教科書関係図書（指導書も含む）の収集は日本一を自負しており、平成16～17年度には、国立情報学研究所の協力により、戦後検定教科書の目録情報を東京学芸大学蔵書目録データベースに登録したところで、全国の教科書情報の基礎として利用されています。

他にもERIC（マイクロフィッシュ版. Educational Resource Information Center）は、筑波大学と並んでの完全収集ということで知名度は高く、毎年数千枚の複写の申し込みが今も続いています。

最近では、図書館にも資料館的役割が必要ではないかとの学長の肝いりで、日高秩父コレクション（書道関係資料）等ユニークな資料の収集も行われはじめています。

（蜂谷 文子）

# 20周年記念

Iijima Hall The 20th Anniversary of the Founding of Tokyo Gakugei University

## 飯島会館

— 辟雍会はここにありませう —

「辟雍会」は、正門を入ってすぐ左側、木立ちの  
中にある「20周年記念飯島会館」2階に本部  
事務所を置いています。この建物は、東京学芸大学創立  
20周年を記念して、1969（昭和44）年に建設された  
ものです。ここで言う「飯島会館」の名は何に由来する  
のでしょうか。

この記念館は、当初、同窓生の寄金で建設しようとい  
う計画で進められました。しかし、なかなか、うまくは  
か取らず、いったんは建設断念という状況にもなったの  
ですが、東京第二師範（豊島師範）卒で、山崎製パン株  
式会社の創立者で、社長でもあった飯島藤十郎氏（写真  
下）が、不足する必要経費の全額を寄付されて、無事に  
着工し完成したものです。

飯島氏は18年前に亡くなっていますが、大学では、  
その遺徳を偲び、昨年（2006年）2月、この会館に氏  
の名を冠して「飯島会館」としました。

氏の人柄を紹介する鷺山恭彦学長の一文が、パンフ  
レットになっておりますが、ここでそれを転載して、広  
く同窓生に紹介いたします。



### 刻苦勉励と創意献身の人・飯島藤十郎

飯島藤十郎氏は、1910（明治43）年に東京郊外の  
三鷹村に農業と雑穀雑貨商を営む飯島源蔵・ラクの長男  
として生まれました。15歳のとき父を失い、中学を中  
退して新宿中村屋に勤めます。新宿中村屋大旦那、相馬  
愛蔵氏は当時著名なクリスチャンビジネスマンで、藤十  
郎氏は新宿中村屋の経営哲学に深い影響を受けました。

向学の心やみがたく、新宿中村屋をやめ、1931（昭  
和6）年、本学の前身である豊島師範二部を受けて合格  
します。50倍の難関を突破したことが「為せば成る」  
の自信を氏に与えました。在学中は、陸上競技部で活躍。  
800、1500メートルで数々の記録を出し、豊島師範  
陸上競技部の黄金時代を築きました。

卒業後、教育者の道を歩みます。最初の勤務校は東京  
向島第一寺島小学校でした。ついで赤坂仲の町小学校に  
勤務。体育実技と理論の研究会を組織して体育の向上を  
はかり、熱心な指導で進学実績を上げるなど、教育者と  
して大きな評価を受けました。

さらに中等教員検定に合格して、東京府立航空工業学  
校に体育教師として赴任。軍事色の強いスパルタ教育全  
盛の時代に合理的な体育指導を実践すると共に、運動場  
作りやモッコ担ぎなど常に生徒たちと共にあり、親しみ  
をこめて「藤さん」と呼ばれ、大変敬愛されました。そ  
の後召集され、軍隊生活を4年間送ります。

戦後、軍隊生活をした市川市の練兵場を開拓する営団  
にそのまま入植しました。そこで東台農業実行組合を設  
立し、氏の指導と創意工夫によって、組合は多くの収穫  
と収益を上げるようになります。こうした経営の経験や、  
キティ台風で被災した濡れわらを肥料用にして小麦と交  
換したことなどを契機に、中村屋の大旦那から学んだ企  
業家精神が氏の中で大きく芽をふきます。

1948（昭和23）年、山崎製パン株式会社を市川市

において創業。前記東台農業実行組合との仕事の関係で飯島名義が使えないため、未亡人となって苦労していた妹、裕代さんの嫁ぎ先の姓・山崎を会社名としました。現在のヤマザキパンのはじまりです。

以来、新宿中村屋の大胆那の教えである「良いものを自分でつくって安く売る」を社の精神とし、食糧難の時代に「お客の一番欲しているサービスをすること」をモットーに事業を展開していきます。やがてヤマザキパンは、両国工場、杉並工場と発展し、1960（昭和35）年には、首都圏に本格的に進出します。

この間、氏は世界水準の製パン技術を知るため、たびたび欧米先進国の業界視察を行い、欧米のパン産業やパン文化の在り方を深く学びました。このことは、その後の日本のパン産業の近代化と技術革新に大きく貢献しました。

「良品廉価」「顧客本位」の経営理念と実績は広く受け入れられ、1966（昭和41）年の大阪進出を契機にヤマザキパンの事業は全国展開を遂げます。また、日本パン工業会の活動を通じて、製パン技術の向上と食生活の改善にも尽力しました。

時代を読む先見性、リスクに果敢に挑戦する精神力と決断力、そして教員時代の生徒指導で培った一人ひとりの力を引き出す啓発力、総力結集の組織力に優れ、そのリーダーシップによって山崎製パン株式会社は大きく発展します。

1969（昭和44）年は、本学が新制大学として出発して丁度20年目に当たっていました。それを記念して「20周年記念会館」の建設が計画されましたが、氏はその建設費の半分以上を寄付して下さいました。当会館は、以後今日に至るまで、本学の施設で最も利用頻度の高い建物として活用・愛用されています。

その後、氏はキリスト教への関心から、キリスト教とキリスト教精神に基づく経営学の研究に力を傾け、クリスチャン実業家たちとの交流を通じて、1973（昭和48）年に洗礼を受けました。

武蔵野工場の全焼などの幾多の苦難を乗り越え、晩年は食品に関する基礎科学の発展に寄与するため、研究者

への助成事業を中心とした飯島記念食品科学振興財団の設立をはじめ、国際的民間慈善団体ワールド・ビジョン・ジャパンなどへの支援を通じて、世界の貧困や抑圧に対して、財と知と技術を提供するなど多彩な社会貢献事業を行いました。

氏は1989（平成元）年、79歳で他界されました。次に氏の好んだ聖書の言葉を掲げます。

一粒の麦、地に落ちて死なずばただひとつにてあらん、  
もし死なば多くの果を結ぶべし

（ヨハネ12：24）

国立大学法人 東京学芸大学長 鷲山 恭彦



会館は武蔵野情緒の木立ちの中にある

## 総務部

辟雍会は、平成18年4月から荒尾禎秀会長による2期目（会長ほか役員の任期は2年）が始まり、加藤正克副会長（再任）、束原昌郎副会長（再任）遠藤満雄副会長（新任）、山本一雄幹事長（新任）という陣容になりました。

平成18年度の会議開催は以下のとおりです。

### ○運営委員会

平成18年4月18日（火）18:30～20:30

- 議題**
- 1 活動方針について
  - 2 経理について
  - 3 理事会（5月27日）について

平成18年5月10日（水）18:30～20:30

- 議題**
- 1 理事会（5月27日）について

平成18年7月5日（水）18:30～20:30

- 議題**
- 1 大学説明会について

平成18年9月19日（火）18:00～20:00

- 議題**
- 1 全国代表者会議（11月3日）について
  - 2 ホームカミングデー（11月3日）について
  - 3 連絡教員・学生幹事について

平成18年11月22日（水）18:00～20:00

- 議題**
- 1 1月講演会について
  - 2 東京学芸大学バレーボール大会後援について
  - 3 新設の東京学芸大学奨学金について
  - 4 運営委員会の月例化について

平成18年12月22日（金）18:00～18:40

- 議題**
- 1 写真展について

平成19年1月24日（水）18:00～20:00

- 議題**
- 1 東京学芸大学奨学金について
  - 2 個人情報について

### ○幹事会

平成18年5月16日（火）18:00～20:00

- 議題**
- 1 平成17年度事業報告について
  - 2 平成17年度決算及び監査について
  - 3 平成18年度事業案・予算案について

- 4 会長候補者推薦規則の一部改正（案）について
- 5 個人情報に関する規則（案）について
- 6 理事会について

平成18年7月21日（金）18:30～20:30

- 議題**
- 1 運営委員会報告について
  - 2 各部の懸案事項について

平成18年10月5日（木）18:00～20:45

- 議題**
- 1 運営委員会報告について
  - 2 全国代表者会議（11月3日）について
  - 3 ホームカミングデー（11月3日）の講演会について
  - 4 平成19年度日程（案）について

### ○理事会

平成18年5月27日（土）14:00～16:00

- 議題**
- 1 役員の選出及び理事会の構成について
  - 2 平成17年度事業報告について
  - 3 平成17年度決算報告について
  - 4 平成17年度会計監査報告について
  - 5 平成18年度事業計画（案）について
  - 6 平成18年度予算（案）について
  - 7 辟雍会会長候補者推薦規則の一部改正（案）について
  - 8 辟雍会個人情報保護規程について
  - 9 全国代表者会議の開催について

### ○全国代表者会議

平成18年11月3日（金）13:00～14:30

- 議題**
- 1 理事会報告について
  - 2 支部の設置について
  - 3 辟雍会個人情報保護規程（案）について
  - 4 辟雍会平成19年度日程（案）について

### ○会計監査（17年度）

平成18年5月19日（金）18:00～20:00

（総務部長・青木 登）

## 事業部

今年度事業部は主催事業として、1) 講演会、2) 写真展、3) キャリア教育支援、4) 学生歌「CD製作」を柱として活動してきた。

まず講演会であるが、本学社会科卒業生の卒業生でもある財団法人総合初等教育研究所室長の梶井貢さんを迎えて、「最近の子どもをめぐる傾向と教育」と題して、ホームカミングデーの11月3日(金) 芸術館ホールで行われた。氏の教育現場で働いてこられた経験から、最近のいじめなどの教育問題に対して、具体例を提示しながら講演をおこなった。

続いて写真展「縄文の夜神楽(よかぐら)」展が2007年1月10日(水)～18日(木)に開催された。これにはプロの写真家滋澤雅人が長年撮りためた貴重で学術的価値の高い縄文土器の写真を公開したものである。なお期間中「縄文

土器の世界」と称して、本学の文化財科学分野教授の木下正史さんの講演会も行った。

学生のキャリア支援は、多様な学生のニーズと卒業生の豊かな人的資源を活用させて、「働くことを真面目に考える会」などさまざまな社会的活動を行っており、今後は大学と財団法人東京都同窓会と辟雍会の三者の協力による新たな展開も考えている。

最後に、会員の皆様の要望の高い学生歌「若草燃ゆる」のCDの製品化の件であるが、東京学芸大学混声合唱団、同管弦楽団の協力により年度内に作成が可能になったことがあげられる。生協等でも販売予定であるので、東京学芸大学の歌として機会ある毎に歌って頂きたいものである。

(事業部長・筒石賢昭)

## 組織部

組織部は、文字通り会を組織するため、一人でも多くの方の入会をお願いし、会費を頂戴していくことが期待される「部」であります。しかし、目前の緊急課題は、既に入会している会員のデータの把握と申せましょう。

組織部では、現在在籍し、そのほとんどが入会している、1年生から3年生の学生と連絡を取り合って、「学生の会」を組織したいと考えてきております。つけても、入会時に学生の住所などの情報を集めておくべきであったと反省しているところです。つまり現状では、連絡の方法が確立していません。大学との情報の共有ができないということは極めて

困難であると言わざるを得ません。

本年度、実行できたことは、これら学生会員へ文書を配布することについて、学内の各教室の先生方の協力をいただき、その結果、学生から辟雍会事務所へ電子メールが届き始めているところです。これらの情報は危険防止のため、外部との回路の無い独立のコンピュータで管理していますので、どうかご安心頂きたいと存じます。今後は、本年度卒業・修了の学生諸君の理解を得て、一人でも多くの入会をお願いしたいと思い、その準備に入っています。皆さまのご理解とご支援を是非お願いいたします。

(組織部長・井口太)

## 広報部

4月から12月までの間、計12回の会議を開き活動方針の策定およびその実践をしてきた。本年度の基本方針は、現在、辟雍会最大の構成員である在学生に対し、有益な情報を提供することとした。このため、昨年以上の内容と更新頻度をもつ活性化したホームページ作りを目指した。4月から12月末日までの更新回数は41回で、昨年度同期と比べ5倍増となった。

7月22日に開催された大学説明会では、辟雍会の紹介パンフレットを作成した。受験希望高校生が親しみを持つよう、イラストを使用した卒業後の進路占いと、多方面で活躍する卒業生からのメッセージを掲載した。パンフレットは説明会

当日、大学正門で配布された。

今回の辟雍3号は入学式前に新入生に配布されることから、彼らにも辟雍会ならではの大学情報を与えることを意識した特集を組んだ。同時に卒業生に対しても、現在の大学内や周辺の様子や変化がわかるような紙面作りを心掛けた。

現在、辟雍会の会計報告等事務報告は郵送で行われているが、経費節減のため、パスワード管理されたホームページにより、これらを会員のみ公開するシステムを考案中である。また、このシステムの利用により、会員がもつ有益な情報を会員のみ提供することや、会員相互間での情報交換も可能となる予定である。

(広報部長・真山茂樹)

## ■ 第2期荒尾体制の1年目

### 第2期荒尾体制スタート

平成18年（2006年）4月から第2期の荒尾体制がスタートしました。前年秋の全国代表者会議で決定された推薦委員会による推薦活動の結果、荒尾禎秀氏の会長再選が決まり、第2期荒尾体制を支える人事として、副会長に加藤正克氏（社団法人・東京学芸大学同窓会副理事長）、遠藤満雄氏（ジャーナリスト、元毎日新聞社）が新たに選任され、東原昌郎氏は留任となりました。また、この第2期荒尾体制スタート直前の3月2日、幹事長の池田義人氏が突然逝去されるという不幸に見舞われました。この池田氏の後任幹事長に山本一雄氏（清水建設）が就任、新たに副幹事長職を設けて鳴海多恵子氏（大学生活科学講座教授）が就任しました。

なお、第2期から会長、副会長、幹事長、副幹事長、各部部长（総務・青木登、組織・井口太、事業・筒石賢昭、広報・真山茂樹）で構成する「運営委員会」を発足させ、基本方針の策定、各事業の実行、推進などをここで検討することになりました。

### 理事会および全国代表者会議

辟雍会の総会であり、最高決定機関である理事会と全国代表者会議は、5月と11月にそれぞれ開催されました。春の理事会では、新人事の承認と事業計画が決定され、秋の代表者会議では懸案であった個人情報保護に関する辟雍会個人情報保護規程が提案され、原案通り承認されました。また、新しい仲間として「千葉県支部」の発足が承認されました。

### ホームカミングデーそして記念講演会

11月3日はホームカミングデーでした。すなわち、卒業生が母校に帰ってくる日です。今年度も小金井祭の初日がそれでした。ホームカミングデーはもともと大学主催の行事として始まったものですが、「辟雍会」の発

足とともに大学と共同でさまざまな行事を行ってきました。

辟雍会のホームカミングデーの主行事は「記念講演会」でした。今回の講師は（財）総合初等教育研究所の梶井貢室長です。梶井氏は1968年（昭和43年）社会科卒業で、一貫して小学校の現場に立ち、定年退職ともに現職について、初等教育を取り巻く様々な問題の研究などに携わっておられます。今回の講演は「最近の子どもをめぐる傾向と教育」と題したものでした。芸術館ホールに現役学生、卒業生などが多数詰め掛ける中、梶井氏は1時間半にわたって話されました。自らの体験に根ざして、現在の教育の諸問題を摘出し、それに対する氏なりの解決の方途を提議するものでした。

40年に近い現場経験はさすがに生々しく、またその問題のよって来るところ、たとえば家庭、家族の力や地域社会の力などの衰退、子供たちの環境を破壊する商業主義やマスメディアの異常な展開などを鋭く指摘されました。それは現代の教育問題が単に学校現場における教育技術の問題ではなく、社会全体の複合的な「病理現象」によるものだということ、問題の根深さと同時に、今すぐ取り組まなければならない緊急課題であることを痛感させるものでした。

小金井祭という「お祭り空間」でのイベントとしては「地味ではないか」との指摘もなくはありませんでしたが、学生たちのお祭りが模擬店や音楽祭のような派手なアトラクションに走る傾向の強い中、学芸大学だからこそ真剣に取り組まなければならない問題を指摘した梶井氏の講演は、まさに意義深いものであったと思います。

### 「縄文の夜神楽」－写真展と講演会

2007年の新年が明けてすぐの1月10日から18日まで芸術館の展示ホールで滋澤雅人氏の写真展「縄文の夜神楽」が開催されました（「辟雍会」主催）。写真家・

滋澤氏は4年前から縄文土器の神秘性に魅せられて、縄文土器の不思議な文様、造形をモノクロ写真で撮り続けてこられたのですが、今回は氏の特別のご好意により、辟雍会主催の展覧会開催に協力していただくことになりました。氏は展覧会開催前から熱心に宣伝活動もやってくださり、会期中は連日会場に詰めっきりで、来場者に丁寧に説明をしておられました。

展示された写真は、縄文土器を中心に約60点。どれも独特の照明によって、モノクロ写真ならではの世界を現出して見せてくれ、改めて土器に込めた古代人の思いを伝えてくれたような気がしました。

写真展最終日の18日夕方6時からは展示会場で講演会が催されました。講師はこの展覧会の推進役であった並河一道東京学芸大学教授（物理学）と考古学専門の立場から木下正史東京学芸大学教授（文化財科学）、そして当の写真家・滋澤雅人氏でした。木下教授は縄文土器が世界にあまり例のない日本独自のものであること、それも東日本からより多く出土していること、縄文の不思議な文様は、大変な物語性を持っていると推察されるが、

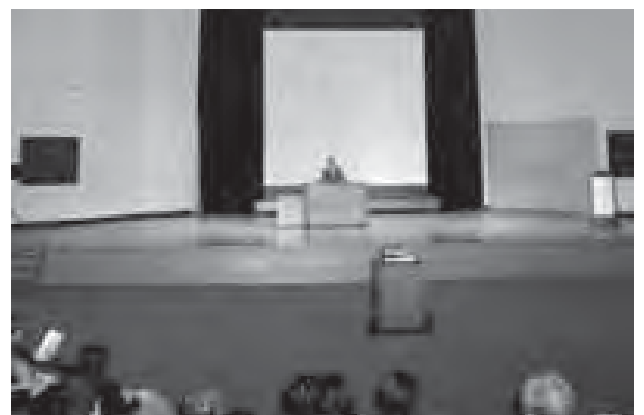
その意味はいまだに謎であることなどを、約1時間にわたって興味深く話されました。

滋澤氏は、縄文土器の不思議さ、それは人間の「火への思い」の表現ではないか、と話しながら、自分がこの土器に魅せられていった経緯を語られました。

寒い真冬の夕べにもかかわらず、会場にはたくさんの聴衆が詰め掛けました。事務局総出で用意した60席の椅子がまたたく間に埋まり、あわてて追加するほどの盛況でした。これまた、辟雍会らしい催しであった、と実感いたしました。  
(文責・遠藤満雄)



「縄文の夜神楽」展



ホームカミングデー講演会

# 編集後記

「辟雍」3号をお届けします。「辟雍会」は（東京学芸大学全国同窓会）という括弧がついています。正門を入ってすぐ左側にある「二〇周年記念飯島会館」の2階に事務所があります。それを示す案内板にも（全国同窓会）とあります。早くこの括弧の取れる日がくるといいな、と思うのですが、それでももう設立4年目を迎えたのです。

4年目と言うことは、この4月に4年生になる諸君が入学した年に設立されたと言うことです。新4年生から辟雍会に入会してもらいました。そしてこの4月に入学してくる1年生にも当然入会していただきますので、これで学部現役の1年生から4年生まで「会員」ということになります。

辟雍会は「全国同窓会」といいながら、世間によくある同窓会とはその設立形態を大きく異にしています。現役の在学学生、大学職員、附属学校関係者まで網羅した、まさしく東京学芸大学の「関係者」すべてが等しく会員資格を有すると言う、あまり前例のない組織だと思います。

そんなことを改めて思いながら、第3号の編集方針を検討しました。そして出した結論は「4月に入会していただく新1年生に読んでもらえるように・・・」というものでした。巻頭の座談会は、そうした基本方針から出てきた企画でした。新1年生から見れば直近の先輩、つまり1年前に入学した先輩たちの本音です。この先輩たちの言葉から、東京学芸大学とはどんなところかを思い描いていただければ幸いです。

「源流を訪ねて」（36ページ～40ページ）の取材を前に、少し「日本教育史」の勉強をしました。40年前の現役学生時代にそんな授業があったはずなのですが、恥ずかしながらまったく記憶に残っておりません。まず附属図書館に行って、関係図書を探しました（附属図書館では卒業生にも閲覧、貸し出しをしていて、簡単な手続きで本を借り出すことができます）。「学校と教師の歴史—日本教育史入門」（川島書店）、「日本教育史」

（玉川大学出版会）などの本を借り出しました。さらに「日本史百科・学校」（東京堂出版）、「日本教育史」（東洋文庫）といった本も手に入れて、師範学校の歴史を中心に調べました。

そこである人物に行き着きました。日本の初代文部大臣であった森有礼です。薩摩藩士の子に生まれ、17歳で島津藩の英国留学生に選ばれて渡英。その後、長くヨーロッパ、アメリカに滞在して、帰国後、啓蒙思想の普及や明治政府の近代化政策の推進に大きな貢献をした人物です。

明治18年（1885年）、39歳で伊藤博文内閣の初代文部大臣に就任し、すぐその翌年に「師範学校令」を交付したのです。本文にも記しましたが、日本の師範学校はそれよりも13年も前に発足していますが、師範学校教育制度と教育内容の基礎はこの森有礼の作った「師範学校令」で形作られたのです。

ところが森はそれから3年後、明治22年（1889年）2月11日朝、折からの明治帝国憲法発布式典に参列するため、永田町の官邸を出ようとしたところを元長州（山口県）藩士の西野文太郎に襲われて命を落としたのでした。43歳でした。

現職の文部大臣がテロリストの凶刃に倒れる・・・現在の日本では考えられないかもしれませんが、幕末から昭和の前期までこうした事件は頻発しました。しかし、森の死で師範学校制度は大きく変わりました（私見ですが、ねじ曲げられたと思うのです）。これもしっかりと認識しておかなくてはならないと思ったものです。

森有礼の伝記などを読んで、彼が凶刃に倒れた時、彼には再婚したばかりの寛子夫人がおり、二人の間には生後8ヶ月の息子・明がいたことが分かりました。この寛子夫人はあの岩倉具視の末娘であり、一度、旧居留米藩主の有馬氏に嫁いだ後、森と再婚したのでした。そして二人の間の子・明はその後、水戸・徳川家の流れを汲む徳川保子と結婚し、哲学者の森有正が生まれ、YWCA元会長の関谷綾子が有正の妹であることなどが分かりました。

この森家と岩倉家、有馬家、そして徳川家の歴史はそのまま日本の近代史であることを知らされましたし、森有礼の孫・有正の著作などを読みかじりまして、「知の力」の凄さを再認識した思いでした。

（遠）

## 辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）機関誌 第3号

発行日 2007（平成19）年3月1日

事務所 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学20周年記念飯島会館内

電話／FAX 042(321)8820

E-mail dousou@u-gakugei.ac.jp

HP: <http://www.u-gakugei.ac.jp/~dousou/>

発行責任者 荒尾 禎 秀

編集責任者 遠藤 満 雄

表紙デザイン 正木 賢 一・二階堂 なつみ

印刷所 (有) サンプロセス

〒207-0012

東京都東大和市新堀1丁目1435-29

電話 042-561-8810

## 編集スタッフ（広報部）

守屋 敦子（60年家庭科卒）

遠藤 満雄（68年社会科卒）

鳴海 多恵子（71年家庭科卒）

小池 敏英（76年養護学校教育卒）

真山 茂樹（78年理科卒）

古瀬 政弘（88年美術科卒）

中農 朋子（89年数学科卒）

蜂谷 文子（元大学情報管理課）

井上 録郎（大学広報・写真）